Ethnosの風景と素描

生活環境の構成について

増田友也

●

ethnosの風景と素描——生活環境の構成について——

序

1—都市と日常生活

2—Athene憲章

3—環境と適応

4—計画なる投企

5—両義性と全体性

6—可能性の領野

7—ethnosに住む

8—ethnosの風景

結

生活環境構成要綱

一般的考察

予備的考察

付記

Ethnosの風景と素描

——生活環境の構成について——

フエドウル——……ではあなたは何を無の上に描き出そうとするのですか

ソクラテス—反ソクラテスを……

——Euparinos ou l'architecte 磯田憲一・訳

序

今のような，一般的な状況のもとで，人の，人としての存在のための，生活環境の構成，について考えるとすれば，まず生活とは何であるか，とりわけある種の，循環的型式 cyclic pattern として機械化し，時間表化し，ほとんど空洞化していながら，それにもかかわらず，あるいはそれ故に，恒常視され，平均化され，計測化されて，外挿法的な諸計画の根本資料 data となり，同時にそれが公準 axiom ともみなされている，いわゆる日常生活とは何であるか，を考え，つづいて環境なり，その環境の構成なりを，逐条的に考えて行くべきであろうけれども，あとで立ちいって述べるように，環境と構成とのこの二者については，環境とは，存在するそのことにおいて変わるべき，もしくは変えらるべきひとつの全体性であり，構成するとは，存在するひとつのし方にほかならぬのであるから，それらは二つの別なことではなく，言わば環境とは，このような意味での変相，もしくは流転する何ものかであり，しかもその転法輪であって，そうしてここでは要するに，環境の構成について，ほりさげて考えてみようとするのであるから，それを環境と構成とのそのような全体的な連関において考えなおしてみたいと思う——しかしまた，このとらえ方において，それらの存在，生活，環境，および構成などの，どのひとつをとって見ても，やがて明らかになるように，いずれも何らかの意味で，けれども本質的な意味で，両義的であることを免れぬのであるから，その環境と構成との全体的連関を，むしろ環境の破壊と建設，と言うような両義性においてとらえ，そこに必然的に介入してくる人の存在性をも，同時に考えて行きたい——そこに要請されてくる，両義性の克服としての全体性への志向は，建設する，もしくは計画する，それらの営為の本源にほかならぬ〈存在する〉そのこと，などに見さだめるべきこととしてそれを考え，そうしてそののちに，当の計画において構成される環境とは何か，に考えおよびたいのであるが，すべてこれらの考えが，しかし，いずれも可能性の地平においてのみ可能であることに，あらかじめ注意しておきたい．

1—都市と日常生活

都市とか，都市社会とか，都市的なるものとか，都市計画とかの，いわゆる人の出逢いの，したがってまた人の自己実現にかかわる場面の，今日の全般的な頽廃を明晰に，分析的に告発してルフェーヴル Lefebvre は，そ

こからの回帰の実践的な諸問題を提起する——都市の頽廃とは，たとえば工業的成長のためのさまざまな条件のなかで，そのひとつなる住居問題の緊急性が，むしろその緊急性の故に，都市の真の諸問題を向うに押しやり，それらを隠蔽しつづけていること，または都市計画と言う名のもとで，まさしく都市や生活の全体的な諸問題が問われているそのときに，それらを単なる工業生産の一般的な系のうちに解消させてしまうことなど，そこで都市はこれらの，言わば内からと，同時に外からとの侵蝕によって息させられ，いまやいわゆる工業化や計画化の機構のなかでのひとつの歯車にすぎなくなり，都市はこのようにして，生産の系列化のための，または当の生産者たちの日常生活や消費生活，このみずからの生産物にほかならぬものの消費などの下意識での制御のための，そう言う物質的装置にすぎなくなり，したがって都市はすでに，〈何ものかの何らかの目的のための〉道具の地位におとしめられたままであり，都市社会もまた，いまやこの巨大な工業化の圧力にふみにじられ，社会そのものがここに解体し，そうして都市問題は，一方では壮大な国土の整備計画とか，交通計画によって規定される諸都市の編み目の構成とかに擬装され，他方では宅地造成とか，団地計画とかの技術的問題に歪曲されてしまう傾向にある——この種の傾向を本来的に内在する思惟のいわゆる合理性とは，都市を人間生活の契機とし，要素とし，条件とすることを拒否し，それによってひとつの不存在証明 alibi を用意しつつ，それを単なる機構とし，単なる欲求充足の道具と見なすような，それはひとつのテロリズムにほかならぬ——都市のこの終焉にちかい存在的危機において，一方しかし都市社会や，都市的なるものは，その根底をこのようにゆすぶられながらもかろうじてなお存続し，その危機の故にかえってこれらのものへの潜在的要求が深化され，強化され，したがって都市的なるものの存在意味，すなわち〈自他の〉同時性，その出逢い，またはそれらの現実化としての集合への要請は，むしろより強く支持されなければならぬであろう——それにはしかし，これらの都市の危機を促進する当のそのもの，分析的手段に埋没して，みずからはそれとも知らずに，存在を断片化しつづけている合理主義のみならず，生産第一主義，経済主義とか，集約的計画主義とか，さらには国家や企業などの管理体制における官僚主義とかの，そう言うさまざまなテロリズム terrorisme をも克服しなければならぬ．　そうしてまたそれらの基礎をなす哲学的合理主義，ひいては自由主義的人間主義をも，内在的に超えて行かねばならぬのである．

ルフェーヴルの言う断片化とは，たとえば仕事とか，交通とか，私生活とか，余暇とかの諸断片は裁断された日常生活のごときであり，その日常生活における日常性と祝祭との乖離であり，さらには個別的に措定され，個別に働くものとされる知覚，知性，理性などの分別であり，そうしてこれらの断片からの還元としての綜合化こそ，まさしく今日的な緊急の課題にほかならぬのであるが，しかしルフェーヴルによれば，これらの断片化そのものが，ひとつには社会的，政治的な階級戦略として，組織的に〈隠密のうちに計画され，下意識的に〉強制されているのであるから，それを論理的な水準において，しかも当のその合理的，分析的思惟による綜合化，全体化を試みて見ようとも，それは断片化された諸要素の単なる集合，単なる組み合わせにとどまり，そこでその試みは必然的に挫折せざるをえないであろう．

もともと日常的なるものは，ルフェーヴルによれば，今日のところ体系化することが不可能であって，それが体系として，諸意味の全体として現われるやいなや，たちどころに崩壊するような，そう言う意味をもたぬものとして，その全姿を現わすのみで，むしろそれは，しきりに意味化を要請されている非・意味の総体であって，しかしながら日常的なるもののこの無意味性は，いまのいわゆる日常性から，それとは別な全体へとあらためて移行し，変貌させられるときにのみ，はじめてひとつの全体的な存在意味を復活しうるのである——ルフェーヴルは，このいわゆる日常的なるもののそのような社会的変革を，都市への権利として要求するのである．

これらのいわゆる存在的危機は，しかし言うまでもなく都市生活のみにあるのではない——自然が，エネルギーの系として対象化される今日においては，ありとあらゆるものが機構的に〈無機的に，機械的に〉配置され bestellen，それにしたがって〈効率的に操作される〉自然に対しては，その目的ごとにそれに応じたさまざまな注文をおしつけることができ，そうして〈その機構にまかせて〉生産物を〈思うままの〉規格どおりに大量生産することもできるのであるが，しかしまたそれと同時に，その作業も〈機構に応じて〉画一化されなければならなくなり，そこでこの生産体制が高度化すればするほど人は，くもはや人ではなくて，人類として生物化され，遂には無機化されて〉，その機構のなかに〈完全に〉組みこまれざるを得なくなり，〈このような技術的発想の場面には〉，人の対象化をさえぎるようなものは何ひとつ立ち現われることもない．　こうしてここまでくれば，あらゆるものの対象化をとめどなくゆるすような，存在についての〈固定〉観念ができあがり，そこで本来的に対象化することのできぬ存在そのものをも対象化し，外在化して表象し，そこで〈当のその本人すら，それと知らずに〉存在は〈その根底から根こそぎに〉忘却されてしまうようになる，とハイデガー Heidegger は言う——人は本来，後にのべるような意味での，いわゆる〈冷たい〉存在者たちに取りかこまれ，それ故に常に迷いに，そうでなければ忘却の安らぎにおちこうしてそこから存在のはてしない頽落がはじまるのである——ルフェーヴルの，いわゆる意味を要請する日常的なるものとは，このような頽落の途上での存在者たちであって，その復活要請にほかならぬのであろう．

要請としての綜合化，もしくは全体性の復活は，ルフェーヴルにとって，ただひとつ，社会的に結集される力による実践のみがそれを可能にし，その実践を通してのみ，〈本質的に，明確に〉規定すべき諸条件のなかでの綜合可能と，そうしてその要請とを引きうけることができ，そこではじめて，これほどまでに分解し，分裂し，散乱したものたちの集合，それも存在の同時性や，同時的な出逢いや，それからまたその形式としての集合への，ゆるぎない志向を引きうけることができるのである——ここで実践と呼ぶものは，しかし，ルフェーヴルにあっては，戦術 tactique としての社会的実践にほかならぬのであって，論理的思惟から来るところの弁証法的統合としてのそれでは，必ずしもない．

ルフェーヴルが，戦術 tactique としての社会的実践に賭けて，都市的なるものの存在意味である同時性，および出逢いの集合を擁護するのは，それらへの要請が頽落した日常性の根底に，〈とりわけ西欧社会には〉今もあ

り，そうしてそれが全体としての人の存在復権の契機とならねばならぬからである——都市的なるものが，その作品〈その枠づけや形態，造型され，手入れの行きとどいた場所，それぞれにふさわしい空間，あるいは諸空間〉として，みずからを創造しつつ，みずからを実現するかぎりにおいて，市民の主体的な我有化が再建され，それがいわゆる日常的な諸拘束から跳出し，そこではじめて想像的なるものを様式化し，それを作品にとり罩めることができるようになるのである——あの記念建造物や祝祭などのようにして．

都市生活が，非日常的な遊戯的活動〈遊び〉に，いまは失われたその重要性，その諸可能性の条件をとりかえすための，祝祭の再建をめざす市民運動は，都市生活の存続するかぎり湮滅することがないであろう，とルフェーヴルの言う場合，その主体的な我有化や，作品化，祝祭，遊びなどの，つまり物質的，および非物質的な交換の現実化やその強化が，都市的なるもの，すなわち同時性，出逢い，そのための集合を場としてのみそれが可能であることは言うまでもない——．

都市社会は，いまのこの危機に際して，しかも空想的な何ごとかによって，いわゆる日常性を歪曲するような，またはその日常性を，押しつけられたまやかしの希望や豊かさで明るくいろどり，そこに満足や幸福を見いだし，もしくは何ものをも見いださぬような，そう言う馴れあいの，存在の真の危機において，その日常性を変えるため，当の自己自身をまず変革することからはじめ，そこでそれらをともに，同時に変貌させようとするのである——何故なら理性的人間 homo-sapiens，工作的人間 homo-faber，遊戯的人間 homo-ludens などのすべては，いずれは日常的人間 homo-quotidianus に頽落し，そうしてそこで人間 homo の性質までも失うにいたるのである，このような日常的人間をなおも人と呼びうるであろうか——潜在的には，それは，自動装置にすぎないからである，そうしてそれ故にこそルフェーヴルは，都市への権利，すなわちまた人であることへの権利を主張し，そのためには，日常性から出発して，日常的なるもののただなかにおいて，日常的なるものを乗りこえなければならぬと言うのである——自己否定の休みなき，終りなき実践で，それはあろう．

ルフェーヴルにとってまた，現代生活とは，要するに，組織化された消費やテロリズムによって維持されているような，受動的な社会的空間そのものなる日常性，しかもそれらの消費やテロリズムの芽ばえ，育くまれるその土壌でもある日常性，そう言う日常性の日々に確立され，強化され，予定表化される，そのことにほかならぬのである——日常性とは，このようにして，いわゆる現代性と不可分な関係にあり，それ故にこそ，たとえば近代化と通称されるさまざまな政治的，社会的，もしくは思想的な営為が，とりわけ現代建築や，いわゆる都市計画が，市民の，人としての存在性を掠めとるテロリズムとして作用することにもなるのであろう．

2—アテネ Athene 憲章

ルフェーヴルは，フッサール Husserl や，ハイデガー Heidegger や，サルトル Sartre や，ポンティ Ponty などの名を挙げて，現象学を祖述するわけではないが，しかし現象学的な関心や，存在論的発想などが，当然のことながら，そこここに見うけられる——同じように，ル・コルビジュエの名を挙げることもしていないが，都市計画をその計画者，もしくは執行機関に応じて三分類し，それぞれを批判しているが，その最初を，善意の人びと〈建築家，著作家〉の都市計画とし，そこにはある種の哲学も認められるが，しかしその哲学が一般的な人間主義，すなわち古典的な自由主義的人間主義に結びつき，人間のための，もしくは，人間的尺度での建設をめざそうとしているようであるが，現代世界においては人間はその規模を変え，かつての尺度もいまでは時代錯誤になり，しかもそのことに気がついていないから，この人間的尺度の伝統もうまくいって，せいぜい形式主義，あるいは審美主義にとどまり，それは芸術の名において，もろもろの古い規範を消費者たちの欲望に，あたかも餌として投げあたえるかのような仕方で利用する，と言っている——その芸術の名において，歴史的様式の採用を，ル・コルビジュエその人もまた強く卻けるのであるが，しかしここで言う形式主義者，もしくは審美主義者とは，おそらくは当のル・コルビジュエ，もしくはその仲間の CIAM 周辺の作家たちにほかならぬであろう．

ル・コルビジュエの起草にかかると伝えられるアテネ憲章は，1928年，当時の進歩的建築家たちを集めて結成された国際現代建築家会議 CIAM の，その建築論的水準を示すところの，そうして周知のようにその以後の現代建築，または都市計画に顕著な影響を与えつづけてきたところの，ひとつの都市計画原理である——現代哲学の劃期とされるハイデガーの，存在と時間が刊行された翌年であったが，これらの建築家たちにとっては，それはなお無縁であった——そのアテネ憲章の，全篇 3 部95条のうち，ここでは第 1 部総論と，第 3 部結論の二，三について，そのイデオロギーのおよその傾向を批判的に考えてみたい．

総論第 1 条に，都市とは，その地域を構成している経済的，社会的，政治的な，ひとつの集合体にすぎぬとあるが，しかしこの集合体が，機械的概念なのかどうかは，そこでは不明であり，ただこの条がもしも結論第84条の，機能的統一体として定義される都市は，空間と，空間の結びつきとを配分して，部分，部分が調和しながら成長していくであろう，と照応するものであるならば，はじめの集合体とは有機体のことであろうか——いわゆる機能主義の時代であるが，それがそもそもすでに当時の機械論的機能と，生物学的機能との両概念を無差別のままにして，その上に組みたてられてきたものである．　アテネ憲章のイデオロギーの全般もまた，そのような時代の思潮の外に出るわけではない——しかしこの集合なる用語については，それとこれとは厳密には別な意味であるにもせよ，ルフェーヴルもまた，そこに都市的なるものの本質を見ていることには注目しておくべきであろう，しかしまた進化説や，連続説をともなう有機体説についてルフェーヴルは，それが都市現実に特有な性格を隠蔽し，さらにはその幻想やイデオロギーが，都市や，都市的なるものにおける，とりわけその歴史的展開での，連続-非連続なる対立命題の弁証法的な dynamisme を隠蔽した，としてきびしく批判する——この批判は，同憲章第 7 条の，都市の発展を支配する要因は連続的変化に従う，と言う点にも，もちろんおよぶべきであろう——しかしこの種の連続説を支えている外挿法的発想についてルフェーヴルは，一方では鋭く批判的でありながら，なおその対立命題 anti-thèse，もしくはそれらの綜合命題 syn-thèse を，弁証法的に明確にするこ

とはしていない——そうしてその点について言うならば，CIAM 結成宣言で，工業技術のもたらした無限に大きく新しい資源と方法を活用すべきである，と言うのをルフェーヴルが，同時性と出逢いとを集合として都市形式化するときのその論理的手続きと見なしている転繹 trans-diction なる方法について，もろもろの情報から出発し，概念的な枠づけと経験的な観察との間の不断のフィード・バックを予想し，それぞれの分野における諸科学の精神的協働によって，自由な創意のうちにも厳密性を，ユートピアのなかに現実的な認識を導入する，と言うその考えと対照するとき，人間存在についての了解に，あるいは少なくとも技術社会への批判において，両者のあいだに，それほどの差異も見られないようにも思われる——しかしまた一方ルフェーヴルが，日常的なるものが無体系であるのは，そのどれもがそれぞれの下部体系をもつからであるとして，たとえば自動車を挙げ，それが本来の交通機関として，いまでは交通するそのことで住むことを圧倒してしまっているが，しかしそれはまた，単なる交通機関にとどまるものではなく，社会的，経済的手段として，それはひとつの環境要素であり，さらにそれが感覚的にして象徴的，実際的にして想像的，と言うような二重の現実性をもつことを明快に分析していることなど，都市生活の変革をめざすには欠くことのできぬ，ひとつの基礎的な作業であろう，したがってこれは，交通についてのアテネ憲章の，route の分類に安心する良識の optimisme とは，もっとも対照的であると言うべきであろう——これらを較べてみるとき，CIAM は，もちろん歴史的制約もあってのことであろうが，要するに当時の建築家的良識の集合体であったとは言えようか，形式主義的建築家の良識で，それはあったであろうが．

たとえば同憲章本論第65条に，建築的に価値あるものに保存さるべきである——それが個々の建物であろうと，たとえ歴史的な都市の全体であろうとも——とあり，それにはしかし幾つかの留保があって，そのひとつに，もしもそれらの保存が，不健康な状態におかれている人びとを見殺しにするのでないならば，と言うのがある——住む人びとの健康な生活を，何よりも優先さすべきものと見なす良識からでそれはあろう——建築についてのある種の価値，のみならず人についての，健康と呼ばれるひとつの価値が疑われることなく，暗黙のうちに承認されていた時代である——それにたとえばWHO憲章の，健康とは肉体，精神的，および社会的に完全な福祉の状態であって，単に病気と虚弱の不在を意味するものではない，とするよりも，すくなくとも一時期は以前のことではあるが，しかしここでいう健康，もしくは完全な福祉，などの概念でさえも，いまでは必ずしも確定しがたいのである——またここで同第70条に，歴史的地域に，新しい建造物を建てようとするときにも，芸術に名をかりて過去の歴史的様式を採るようなことは許さるべきではないと言う強い主張のあることを言いたしておきたい，そのようなし方を深い意味で，文化－環境の冒瀆にほかならぬとして，それが，告発されるべきものだからである——しかしこれについても今にして思えば，歴史地域としてそれを，今なお生きつづけている人の日常的な時間や空間から切りはなし，区別できるような，そう言う凍結した不存在地域を措定しうるものとしてのことであろうが……．

文化を国家のイデオロギーとみなすルフェーヴルにとって，それらはまたおのずから別な問題ではあろうが，それにしても人がそのそこに住みつくほかないその歴史と自然とについて，歴史の影が薄れるとも自然が前面に現われ，歴史が前面に現われるとき自然にその影を薄くする，と言うのは，現象としての時間と空間とが，gestalt 心理学における図と地とのように，不可分な全体において考えられているからではあろうが，もしこの通りであるならば，歴史的地域とは，人のいまも生きるその歴史と自然との全体ではなくて，果たして何の謂いであろうか……．

——アテネ憲章とは，ヒットラーに無制限な権力行使を認める授権法の制立したその年，1933年のアテネでの CIAM 会議での宣言である——．

いまここで考えようとしている生活環境の構成について，それがこのようなアテネ憲章を超えていくべきものであるならば，建築における，あるいはひろく一般的な今日における諸状況から目をそらせることなしに，この主題に立ち向かわなければなるまい，そのほかどのような方便も，近道もまた有りえぬように，今は思われるからである——ここで今日的な一般的状況と言うのは，存在経験の全般的な疎遠において，いま，存在する sein の根源が問われ，生きる leben が問われ，生きる環境世界が問われ，建てる bauen が問われ，住む wohnen が鋭く問われている危機的な思想的状況，ひいては建築学的状況をさすのである——今日の建築家たちのうち，一体だれが今までに住むことを，建てることを問いただしたか，そうしてこれらの問いに誠実に答えるためには，あとでのべるように wohnen—bauen—bewohnen—sein などの意味連関から，生きる leben の現一存在に，もしくは実存に立ち帰り，さらにそれらの根底に，不可避的にひそむ宿命的な両義性に立ち向かわざるをえないであろう，——われ，ひとともに，この下意識での，けれども根源的な両義性の，言わば chaos のうず巻きにまきこまれて，その存在の座標軸をばらばらに揺すぶられつづけていることこそ，もっとも深刻な意味での，今日的な不安，もしくは危機の状況ではないのであろうか——建築すること，或は建設することも，これらがいずれも　存在する　そのことのひとつの様態にほかならぬからには，この存在の危機を，まさにその危機において克服する試みもまた，当然に問いつめられているひとつの課題 theme として，ここに引きうけざるをえないであろう——そうしてこれには同時に，建築家にとって，建設に参加するとは何ごとであるか，もしくは今日において，建築とは何であり得るか，と言うような根底的な問いにも答えるべきある種の配慮が要請されることになろう．

これらのことからここでは作業上，主題を建設と破壊にひとまず変換して，それによって生活環境の構成としての　建設する　そのことに内在的な両義性，その両義性の実践的克服としての，全体性への追求などを試みてみようと思うのである．

——破壊する　とここで言うのは，〈ある種の〉力による状態の不可逆的な，急激な変革である，と一応は見ておきたい——そうするとしかし，　建設する　そのことについてもまた，これとまったく同じ解釈が可能であろうし，そうしてそのような建設を創造と呼ぶことも，改造と呼ぶこともまた可能であろう——しかしながら今の場合での通常では，破壊されるのが，言うまでもなく環境であり，この破壊する力とは建築や，建築群や，あるいは都市などの，行為としての建設にほかならぬが，しかしそれを都市建設と環境破壊として捉えるのでは，そこからの論理的展開は望むべくもな

いであろう，と言うのはこの擬似的な相補的命題は，このままではなお論理的な二律背反でも，また両義的でもなく，そうしてしかもそのような相補性を統合的に超克し得るような論理も論証も，いまのところ見あたらないのである．

建設するそのことは，その向うに範疇化 categorize し得る可能性を志向する，言わば開放的な，もしくは道具的な系であるのに対して，破壊するそのことは，それ自体にとどまる自己完結的な，閉鎖的系であると言えよう——またたとえば建設のための破壊，という言明でのその破壊には，……のための，と言う外延的な条件づけ，つまりは道具性があって，そこでは破壊の完結性は無視され，その点につては，建設とまったく同じことになり，したがってそれは，建設の開放的系におかれ，その系における予備的な前段階にほかならぬとも見うるであろう——建設と破壊とのそれぞれに見らるる道具性と完結性とのこのような対比から，ある種の genre の現代芸術に，とりわけその今日的な技術化への経過のなかで，行為としての建設と破壊とのいずれにも，作品としての技術性と芸術性とを認めると言う要請もあらわれてくるのであろう，時には，破壊こそ芸術である，と言うような——建設と破壊とにかかわる真の困難さは，それがこのような道具性と完結性，もしくは技術性と芸術性などの一応の対立概念の，いずれも言わばこのような両極性の曖昧さにあり，そうしてこの曖昧さこそ本来的に，両極的に見ることの許されぬ存在の，その両義性を見のがしているからにほかならぬのではなかろうか——したがってまたもしもたとえば，建築が，よく言われるように自然-環境に調和したり，地理学的景観に適合したりすることが可能であるならば，建設されるのは建築であり，都市であり，保存されるのは自然-環境であり，景観であって，そこでも，技術的方法論を除いては，何ひとつ問題とはなりえない——それはしかし，その技術的方法論をも含めて論理的に，もしくは実践的にも可能であろうか．

主題はそれ故にはじめから，環境の破壊と建設なる明確な対立命題，もしくは両義的な事象として提出されざるをえないのである．

3—環境と適応

人は，自然-環境においてでしか，建設することができない——あたかも人が，その環境においてでしか生きることができぬのと同じである——そうしてこの〈生きる〉と言うことは，生きているそのことを行為しつづけることであって，ゲーレン Gehlen によれば，そのような意味で行為することは，予見と計画とにもとづいて現実を変化させることにほかならぬ——変化させられた現実と，その変化の手段との全体を，ゲーレンは文化と呼ぶのであるが，前にも触れたとおり，ルフェーヴルは文化を，神話以上の国家的イデオロギーであるとし，したがって文化的統一とは，国家における最高の水準，つまり〈社会的一〉文化的諸制度の水準に位置するとし，それ故にこそ〈国家権力は〉，たとえば大衆文化とか，文化財とかに〈指令を与え〉，糧を与えたりもする，と言うのである——文化についての，これらのゲーレンとルフェーヴルとのそれぞれの理解に，分析的と操作的との，もしくは科学的と政治的との二つの構えを見ることを，ここに指摘しておきたい——建設するそのことが，存在するひとつのし方であると言う意味で，それは本来的に哲学に内属し，しかしまた同時にそれが存在復権の政治をめざすからにほかならぬ．

——ここで言う変化する現実的なるものの全体を，ゲーレンやボイテンティク Buytendijk らは世界なる人間学的概念でおきかえ，環境なる語を生物学的次元であるとしてしりぞけている——生物学的環境が表象的，記号的であり，種的でもあるのに対して，人間的世界が存在論的，象徴的であり，個的でもあることによるのであろうか——ルフェーヴルも，この語が曖昧であるとするのであるが，しかしそれらはいずれも形而上学の問題であるよりも，定義の問題であるように見うけられるし，一方世界なる用語は現象学に，もしくは存在論に深く根をおろしていて，それは自己に先だってある，自己とともにあると言うような，時には超越論的な措定でもあり，時としてはまた，石は世界をもたぬ，同じように動植物もまったく世界をもたぬ，とハイデガーの言う場合のように，その世界は，ポンティが実存の根底に非人称的な先身体性を措定しようとするにもかかわらず，実証的諸科学における対象化，もしくはその表象的空間との間に，なおかなりな距離があり，とりわけ対象的措定によるその計測性については，一見まったくの疎隔さえも見られるように思われるので，建設することの実践的論理をめざす今は，むしろ環境と適応との自律的な，したがって決定論的な，有機的な全体の系なる生物学的な，ecological な概念としてではなく，しかしそのような構造において，人，土地，歴史，文化などの包括概念としての ethnos，そうしてそのそこにこそ人の生き，死ぬその場所にほかならぬ存在のその世界としての ethnos の了解において，ethno-ecological な意味での環境概念をとりたい，ランガー Langer が，建築的空間をそのほかの現象的空間から区別するものとして，それを ethnic domain と名づけたように——そうして，たとえば中部 Australia の Arunta や，Deccan plateau の Todas などの未開社会での non-metrical な，けれどもなおある種の計測性をそこに見うるような，そう言う空間概念をとり入れた方が approach しやすいように思われるのである——還元主義 reductionism 的単純化の，方法論的な危険については言うまでもなく，絶えず注意しながらそれを慎重に避けて行かねばならぬとしても，とにかく実践的に，具体的に approach しなければならぬからである，そうしてその環境－世界がこれらの措定のために，ひとつにはまた言葉の宿命にもよって，半ば外在化 vorstellen され，そこで実存の向うに切り離されそうになろうとも，絶えずまたそのことに配慮しながら，この考えを深めてみたいと思うのである．

たとえば同じようにして，人の全体性をめざす試みにおいてデュボス Dubos は，生命の諸現象が，遺伝，過去の経験，および環境因子によって支配されるとする決定論と，それにもかかわらず人がみずからそれらを超えるその自由意志との，二元論的な相補的関係を指摘し，そうしてそれぞれの人をとりまく環境が，その人の肉体的，精神的可能性のうちどれを生活において現実化するかを決定する，と言うのである——語句の上では，外的な環境が内的な可能性を現実性へと選定する，のでそれはあろうし，またそこで，遺伝子が一定の特徴や，特異性を決定するのではなく，〈環境に応ずる〉反応性やその応答のし方を決定する，とも言うのであるから，〈決定する〉と言うのを文字どおりに，同一律的な決定とは受けとらず，むしろ現実化されうる可能的なるものの多義性 ambiguity において，それを実存的な選択と解するのがふさわしいのではないか，ましてデュボス自

身も別のところで，適応的な適合性 adaptive fitness について，それが選択的であると言うのである——デュボスをこのように解しようとまでするのは，生物学的な現象に存在の栖の原型を見いだす可能性を，さぐってみたいからであるが，いずれにしてもデュボスにあっては，自由意志もまた何ほどかの決定論的な要素をもつことになり，そのかぎりでの環境への対象的な，計測的な接近可能を示唆するものと見うるであろう．

遺伝的な，linear な制御よりも，環境による適応的な制御の方を重視するデュボスは，その制御のあり方について，Dobzhansky を引いて，環境が〈可能的な〉計画をつくる装置の役割をはたし，〈環境有機体連関での〉自然淘汰が制御の mechanism としての機能を果している——環境による automatic な計画づくりを，自然淘汰が制御すると言うことであろう——その遺伝的な構成を変えながら，適応的に応答しうるあらゆる機会を捉えるように，環境が人間と言う種に絶えず働きかけている，と言うのである——このようにして人は，遁れるすべなく，その環境に住みこみ，その環境を変えつつ，変わり行く環境とともに，変えられつづけて行くのであって，このことを適応と呼ぶのであるが，しかし生物学的な意味においては，人はその適応性において未熟な存在であって——まさにこの故に人を，たとえ作業的にもせよ，生物学的次元におくことも，またそこにいわゆる進化論的な外挿法を援用することもできなくなるであろう．　それ故にここで言う ethno-ecological な環境概念は，そのような生物学的概念にはとおく，むしろそれは存在論的であって，したがってこれらの生物学的，もしくは進化論的思考のいずれをもその方法とはしないであろう——それだけに人は，記号的意味連関よりも，象徴的意味連関にはるかに根づよく組みこまれ，したがってまたあやふやな，しかしながら同時に理性的 homo-sapiens でもあるような，言わば人を，理性 ratio の領域に，同時に動物の次元におくような，そう言う animal rationale を骨肉として，しかも諸意味でそれを養いつづけているような，そう言う意味での，つまりいわゆる人間的意味，ここで言う人種的 ethnic な意味での環境であり，その環境への適応にほかならぬのであるが，この適応とはしたがってまた，それをしいて機構的に言うならば，生物学的な，生理学的次元での metabolism や，生理-心理学的な，もしくは ecological な homeostasis を，言わば先身体性の記号的機構としてもち，のみならず象徴的 homo-symbolicum でもあり，そうしてそれらのすべてに存在が深く根をおろし，住みつくところの ethno-ecological な，全体的な系での均衡維持機構であり，そうでありつつさらにそれらを内在的に，否定的に超えもする，ひとつの世界的な統合的機構であって，これがゲーレンの，予見と計画とにもとづくと言う，その行為の存在論的解釈であり，そうしてその現象学的な機構でもあろう——このようにしてその世界の原像が，近似的にここで言う ethno-ecological な意味での環境にほかならぬとも見うるであろう——近似的にはそれ故に，経験科学的なある種の計測性や，半ば外在化されるその予測可能性を，やはりその危険をおかしながら志向することにもなるのであろうか．

このような環境－世界における情報が，単なる記号として消えうせてしまうことなく，なんらかの形成作用をはたすためには，受肉した精神は，それらの刺激 stimulus に対しても，創造的に反応 répondre しなければならぬわけであり，この創造的反応によって，そのつど〈内に〉生まれ変わる構造を，ピアジェ Piaget は図式 schéma と呼ぶのであるが，この種の図式をポンティは，客体化へと向かうあらゆる認識の主体的作用としての，先人称的な身体性の，その身体図式と名づけ，そうすることによって現象学の基底に，たとえば gestalt 心理学のような，現象学的な経験科学の諸成果を着床させようとするのである，図式のような表象的記号化の危険をおかしながらで，それはある——それにしても，そのような新しい経験諸科学は，全体的ではあっても記述的にとどまり，法則的ではあっても計測的ではなく，それ故ここで　近似的に　と言っても，それは必ずしも量的な近似，たとえ ethno-ecological な意味にもせよ，そのような計測性における近似性のみではなく，むしろそれは言葉として，あるいは表象的記号そのものとして全体を，model 化し，構造化し，その model や構造の現実化の可能性の広がりの，その境界劃定の simulate 可能な，と言うほどの近似的な変換をも，それは含意するものであって，そうすると現象そのものは，言わばこの model や structure や simulation のまわりに，不定形 amorphous にふくらみ，ひろがることになるであろう——あたかも音楽において，音の系列は，完全に数の系列に変換でき，その数の系列を通じて，音の系列を正確に再現することが可能になろうし，そうしてしかし音楽的現象そのものは，この音の系列のまわりにふくらみ，さまざまな偶然性にもいろどられながらただよい，流れるであろうように，である——そうして，こう言う存在のまったき類落化にほかならぬ変換の試みを通じて，これらの現象の向うに，ひとまず外的なるもの physis を措定し，あまつさえその意味作用 poiesis をまで無視して，そうしておいて今度は，それらを予見と計画の過程で呼びさまし，逆にそれを存在意味としてよみがえらせ，こうしてフランクル Frankl の，実存すると言うことは，自己自身を出て自己自身にむけて歩むことであって，その場合に人は身体的，心理的なものの平面を出て，精神的なものの空間を通り，自己自身にいたりつくのである．　〈実存すると言うことは，フランクルにあっては，精神のうちにおいて行なわれるのであるが〉，人はこのようにして，精神的実存として心身の事実性である自己自身に向かう，と言うその心身の事実性への立ち帰りが，そうしてその事実性を通路として，ポンティの試みるような身体性への，さらには具体性への立ち帰りが，あるいは期待できるかもしれないからである——これもひとつの方法論的試みにほかならぬのであるが，要するにそれは，ハイデガーのいわゆる現－存在の，その高みにおいて，存在者たちの存在性を逐次に解除しながら，やがては表象的世界を構成し，その構成を通じて，現－存在からの，同時に表象的世界からの，言わばこの両極からの，ほかならぬ環境の具体性への立ち帰り，でそれはあって，それは単に環境を外在化し，それに立ち向かう適応などではなく，言わばその外在化の途上における，したがって半ば外在化される環境での，その適応である．

人は，このような意味での環境において，しかも，途上的に半ば外在化しつつその環境に立ち向かってでしか，適応することも，行為することも，したがってまた建設することもできない，とするとそれらのことにおいて，ゲーレンの指摘するとおり，言わば一義的にそのようなし方で環境に立ち向い，環境を変えつづけるほかないのである——絶えざる破壊とでも言うべきであろうか——実のところここで言う環境や適応の概念は，それが絶えず変化しつづけて行くそのことに根拠をおいてのみ，成立するものであ

って，その ethno-ecological な系での変化の場面を，やはり半ばは表象的に，一方で建設と言い，他方で同時に，それを破壊と言うのである——建設する と言うことは，この意味で，環境を外在化しながら変える，もしくは，変わりゆくものとしてそれを外在化することにほかならぬであろう——自然－環境における，この外的なるもの physis の変革は，意味論的には，これらのことの，さらには環境の具体性への立ち帰りの，その具体的な表現であると見ることができよう．

これらのことを，外在化される環境の側から言えば，環境の改造であり，同時にそれは破壊でもある——けれどもこれらのことは，やはりよく言われるような，建設には破壊がともなう，と言うような継起的な事柄ではなく，また二者択一の許されるような事柄でもない——Vietta はハイデガーの，いわゆる世界が外在化される科学において，その研究の成果から成果への，終りなき根問いのような経過に言及して，破壊と建設とが一貫した連通管をなしている，と継起的にそれをとらえているが，ここにはむしろその行為において，あるいは建設するそのことにおいて，論理的にも，実践的にも同時的な，絶対の二律背反 antinomy があるのみであろう——両義的 ambivalent と言うべきであろう——両義的と言うまさにそのことにまつわりつく情念であって，それが了解を，もしくは認識をいろどるであろうことは言うまでもないし，したがってこのここでは，言語的な形式論理としてよりも，人間学的水準においての関心である故に，この形而上学的には絶対の矛盾を，存在論的な両義性として見さだめてみたいと思う．

——この両義性なる絶対の矛盾において，それをしかし形式論理としてのそれではなく，もしもそれを弁証法的矛盾として identify することができるならば，そこから建設することへの参加と言う，弁証法的統合への道が開かれることになるかもしれないのである——しかしその道すじは言うまでもなく，見かけほど linear でも，straight でもないであろうが，そのことは今しばらく措く．

4—計画なる投企

ここでまた 建設する そのことに立ち帰り，その実践でのひとつの前段階的，予備的行為と見なされている設計，もしくは計画について考えてみたい——それによって，設計する，もしくは計画する entwurfen, projeter, project そのことの意味を深くさぐり，そこからさらに，むしろ同時に，それの深みをとおして〈建設する〉そのことの本源に測鉛をおろすことになるかもしれぬからである——．

設計—計画 Entwurf, projet, project とは，建築家にとって，もちろん建設の具体的実践の，未来志向での途上における，常に中間的な，したがって欠くことのできぬ手続きであり，そのかぎりでは，それをひとつの手段と見ることもできようが，しかしその指し図における image のまったき現実性においてそれは，その建築家にとって，すでに共時的に決定されているひとつの目的 end-purpose にほかならぬとも言えよう——この場合の指し図が手段であり，同時に目的であると言うこともまた，まえに建設と破壊とに見いだした道具性と完結性などについてと同じように，両義性にほかならぬのではあるが，しかし指し図そのものなる設計図としての Plan についてはボルノー Bollnow も，それがやがて計画的 planmassig に実施されなければならぬと言う意味で，時間的事象にうつされるとはしても，それがその経過においても，何ひとつ余計なものを付け加える必要のない万全なものであるかぎり，それは完結したものである，とその完結性を指摘するとおりであって，しかしまたこのような決定的な指し図としてではなく，ひとつの全体的な試行にほかならぬ 計画する そのこと一般について，それがたとえ安全率のような，ある種の概念的な操作を行なってみたところで，起こりうべきあらゆる偶然性を計算に入れるような精確さはのぞむべくもないし，ましてそれが生活設計と通称されるような，生活の全体にかかわる場合，それはごく一般的な，不確定な意味でしか，それについて語ることができないと言うのである——計画するそのことと，ひとつの意志決定なる設計図との疎隔がここで指摘されようが，しかしその指し図としての設計図そのものは，計画することの全体に内属するひとつの手続きとも見うるのであって，したがってこの疎隔は，計画するそのことの不確定性からくるものであることは，言うまでもないであろう——しかしまた建築の，または建設の施主 client は，そのいわゆる日常性において，それがどのような精度においてであれ，とにかくそこに事物化され，現実化されたそのものに，それが存在を意味づける自己の作品として関心するよりも，その道具性において，はるかに強く関心するのが，とりわけ今日での通常であって，したがってまたそれが空間化され，時間化されて行くその過程に，格別の関心があるわけでもない——ましてその作品とは，本来的に，それができあがって，事物的にそこにあるかのように見えながら，事実はそれが決して純粋に事物化されえぬものであり，それと同じようにして，それはまた純粋に目的化されうるものでもなく，依然としてそれは事物であり，道具でもありつづける——外的なるもの physis としてのそれは，ルフェーヴルの言うような，それを生活の契機として，要素として，条件として要請されているわけではなく，まさにそれを世界として，そこに住みつくそのことにおいて，はじめて存在の全体性を獲得し，そこで存在の真の目的－意味となるのであるから，そこには両義的なるものを超える全体性があり，ただそれが日常的，事物的であるかぎりにおいてのみ，装置として，道具としてそこにあり，そうしてそれは今日の頽落しはてた日常性においては，とりわけそうである——建設，もしくは計画が，本来的にこのように，両義性を超えるところの全体性をめざすものであり，そのための論理的，実践的方法を，今はもとめているのであって，それは決して事物化に，したがってまた装置に終るものではないことなど，いずれは明らかにされるであろう．

——しかしまた本来的に道具としての存在は，ある個有の意味で，人の日常に出逢うところのものであり——人が，人として生きているそのこと，生きるそのことを行為しつづけること，もしくは，生のわれをしてわれならしむる，そのことにほかならぬ現－存在 Da-sein において，脱自的な現存在が，日常的な，けれどもなお実存的な世界のなかで出逢うところの，そのものであり，それは何よりもまずもろもろの事物，すなわち現存在ならざる存在者たちであって，現存在はそれを利用したり，捨てたり，計画したり，吟味したり，作り出したりと言うし方で，つまりそれらの配慮 besorgen において，それらのものに出逢うのである——このようにして つくる こと，計画する ことなどは，いずれも 存在する ことの，

それぞれひとつの現われにほかならぬのであるが，Bossによれば，このような配慮においてのみ出逢う，いわゆる内世界的な存在者たちは，一般に道具性をもつものであって，この道具のあり方，すなわち道具存在〈用象性〉Zuhandene とは，……するためのもの と言う存在性格をもつのである——そうして，現存在ならざる事物とは，ただ抽象的観点においてのみ措定されるものにすぎぬのであって，それは道具存在者から，……のために と言う存在性格を解除した，言わば欠落的存在者であって，それを直前存在Vorhandene，もしくは事物存在と呼ぶのである——したがって，現存在が世界とかかわる場であるところの，その内存在 In-sein におけるそれらの存在者たちとは，存在論的な存在のそれぞれの仕方においてではあるが，みずからもそのひとつである脱自的な現存在 Dasein と，道具的なものと，それから事物的なるものとであるが，Vietta はこのあとの二つを環境世界と総称して，いわゆる世界，もしくは現存在と区別し，その環境世界を，いわゆる世界の頽落態 Verfallen とする——しかしそこには，やはり現存在なる他我もまた内属する筈であろうから，ここではこの内存在の全領野を，むしろ環境世界と見ておきたい——そこでこの環境世界は，他我なる現存在を，その間身体性 inter-corporéité において，もしくは現存在ならざる存在者たちを，その道具性において，もしくは事物性において，そのつど半ば外在化しつつ，擬似対称的に建築家のまえに，立ち現わさしめることになるのである．

現－存在としての建築家は，現実化された projet が，道具性にかかわるかぎり，みずからは本来的に，現位 da に立ちながら，さきほど ethno—ecological な意味で環境と名づけた ethnos に，この内存在の領野に，もしくは環境世界に，すなわち真に日常的な，そうして擬似対称的であるけれども，なお途上的に存在的な，そう言う環境世界に脱自的に移り入り，現存在，道具的存在者，事物的存在者たちにそれぞれ出逢い，その出逢いの呼応において，そのものたちを捜査しながら，その捜査を通じてみずからもまた，同時に捜査されつつ，その計画 Entwurf，projet を事実化し，深化させるほかないのである——それらはしかし，近代科学の原理としての，研究するそのこと Forschung における先行 Vorgehen，操性 Verfahren，営為 Betrieb のうち，先行的に一定の事象系列の構図 Entwurf をつくり，それを仮説的法則によって検証すると言う，その事象系列の構図や，それにもとづく実験的操性とは，相似的ではあろうけれども，まったく同じと言うのではなく，むしろそれは，実存に根底的な先身体性の身体図式における捜査に類するものであって，同時にそれが，客体化へと向かいつつ，そのそこに擬似対象を捉え，捉えるそのことにおいて検証 logos しながら，と言うようなし方でのそれである——それはまた，日常的に表象的な，感覚的，経験的水準を否定的に，弁証法的に超える現位 da の高み，あるいは実存の深みからの立ち帰りとしての出逢い，その出逢いにおける実存的操性でなければならぬであろう——しかしそれにしても，計画 projet そのものの，指し図としての設計図そのもののような，机上での完結的な実現は，身体性を生きるそのことによって世界に住みつくと言うその実存的世界の，もしくはここで言う環境世界の，その全体性への志向として，それはいかにして可能であろうか．

ここで言う現－存在 Da-sein なる存在の構造は，現存在 Dasein が，みずからの存在において，その存在に対して，ひとつの存在関係をもつその関係であって，このときその存在とともに，その存在を通じて，その存在がみずからに了解されることであり，それはまた同時に，その存在がみずからに開示されていると言うことでもあり，したがってこのときの，そのみずからの存在が，……の外に出で－立つ Ek-sistenz〈ec-sistere〉と言うし方での存在であって，それが実存 Existenz と呼ばれる存在の両義的な様態なのである——つまりこのような現存在が，世界に，あるいは環境世界での存在者たちの露呈に投げ出され，投げ出されつつ，同時にみずからを，当の環境世界にその脱自において投げかけているのである——ハイデガーの現－存在 Da－sein は，実存 Existenz，脱自存在 Ek－sistenz，および現位 da に開示されているその存在の明るみ Lichtung，と言う三重の存在範疇において，しかし同時に開示されているのであるが，このことよりも，現存在の本質が，現存在の実存 Existenz に存するとするその前期的命題において，サルトルの実存 existence にほぼ同じであろうと見うるのであるが，しかしまた言うまでもなくそこには，精神分析医学における，Boss と Binswanger との間に見られるほどの差異は，ハイデガーその人の前後の思索的展開に応じて，サルトルとの間にそれぞれやはりあるのであろうか．

建築家はみずから実存するが，しかしそれはハイデガーが頽落した存在性をもつにすぎぬと言うその日常性，しかもルフェーヴルにあってはそれさえ無記な，そう言う日常的な事物の世界を対象的に眼下に見おろして，それを magic－hand か何かの道具で操作することで計画し，建築するのではなく，それは何よりもまず実存の被投において，存在者たちのただなかに投げ出されながら，存在者たちと，先きだって呼応しつつ，その存在者たちの，存在への呼びかけに脱自的に応答するのである——合一するそのことにほかならぬこの呼応 Entsprechen において，みずからを計画へと先駆させながら操作しつつ，存在者たちへのこの脱自的な投げかけにおいて，投げ返されながら，存在者たちの存在意味をまさぐりつづける——擬似対象とのこれらの先駆的な呼応にみちびかれながら，それらの存在者たちとの出逢いにおいて，真摯な配慮 Besorgen に裏付けられつつ，それらを存在意味において，捜査しながら，そのまなじりのうら，言わばうつろなまなざしの向うに，あらぬものへの待機的な志向において，その日常的な世界の事象を捉えながら，それらの存在性をそのつど復活せしめながら，である——このような言わば弁証法的超越の高みからの，もしくは実存的深みからの立ち帰りとして，存在者たちの呼びかけに呼応し，それらの存在意味をまさぐり，遂には見きわめるし方のそのことを，高くさとりて俗にかえれと言い，竹のことは竹にならえと言う詩人芭蕉その人に見ることができるのではなかろうか．

言うまでもなく，無記の事物がこの操作的場面に立ちあらわれることはありえない——外在化へと向かう認識の，その自然なはたらきのせいで，擬似対象的な事物が，あたかも無記の存在者かのようにして，計画するその場面に，あるいはその向うに投げ出されているように見えるにしても，それは計画の向う側，もしくはその以前にすぎず，やがてそれらは存在意味において捉えられ，操性されはじめるものと見らるべきであろう——外的なるもの physis の措定としての，計画する projeter とは，言いかえれば，可能性の有の地平において，みずから外的なるもの physis の露呈のただなかに投げ入れられ，投げ入れられつつ，外的なるものにみずからを投げか

け，そこで外的なるものに先駆的に，したがってまた先構造的に呼応しつつ，その呼びかけ poiesis をあらわにし，そう言うそれぞれの現われにほかならぬこの真の出逢いにおいて，外的なるものの呼びかけの意味作用を投げ返し，そのそこに構造的に，外的なるものの存在意味を結晶する，同時にみずからが，このほかならぬみずからの身体性に，構造的に結晶すると言うようなし方においてで，それはある——計画するとは，このようにして存在意味の，外的なるものへの投げ返し pro—jet による結晶化であると言えようか．

それは言わば，このような一連の適応－行為の具体的なあらわれにほかならぬのであって，そうしてまたそれは，さきのゲーレンの，いわゆる予見が，未来志向を意味するものにほかならぬように，計画 projet もまた，たとえそれが常に途上的，中間的であるにもせよ，それがひとつの提示 Präsentation であるかぎり，未来連関における現在 Präsenz に，同時にまた当然に，現位 da に内属することは明らかであって，それをさきの外的なるものへの存在意味の投げ返しの場合と同じように，提示するそのことにおける，現存在の諸可能性の未来への投げかけ pro－jet であるとも言えよう．

このような外的なるものへの投射，未来への投射，と言う二重の意味での計画は，それ故にまた，投企と邦訳されるハイデガーの Entwurf，サルトルの projet に，根底的に通じているものであろう——投企 Entwurf と言う場合，〈何が投げるのか〉のその何かは，人ではなくて，存在そのものにほかならぬ，存在が人を，人の本質として，現存在の脱自存在 Ek—sistenz へと送る，そうしてこの運命は，存在の明るみとして自性的に生起するのであって，存在はこの明るみとしてある，とハイデガーの言うとき，人は，現にそこにありながら，しかも現にないことになる．

またサルトルによれば，実存とは，世界の内に投げ出されている自己自身が，自己自身の外に，自己を絶えず投げ返しつづける投企 projet であって，それは，それがあるところのもの〈即自存在〉でなく，それがあらぬところのものであるような存在〈対自存在〉をめざす，そう言う絶えざる自己否定を意味し，そのような投企において，即自と対自のこの両立不可能なものの，全体性としての綜合可能をめざすのである——投企 projet そのことにおける即自と対自とのこの矛盾は，上のハイデガーの，現にありながら同時に現にない，とする両義性そのことにほかならぬが，それがここでは可能性としての全体性をめざすことで，ひとまず克服されているかに見えるが，しかしそれはサルトルによれば，純粋な愛や美のように，到達不可能な可能性として paradoxical にめざされるのみである——計画 projet における，建設と破壊との両義性の全体的な綜合可能についても，これと同じことになるのではないか．

5—両義性と全体性

実のところ，この全体存在への到達の可能性の不可能さ，もしくはその不可能性の可能さこそ，世界－内－存在なる存在措定の論理的な帰結であり，もしくは実存の存在論的な事実にほかならず，したがってそれはまた，人間存在そのものの始源的な矛盾，もしくはその両義性に由来するものと見ることができよう——人が真に生きはじめるそのとき，すなわち現位 da にあるにいたるやいなや，人の死がはじまると言うその死について，まさしくその非存在においてすべてが終り，時間が消える，その追い越しがたい存在可能の可能性として開示されている死を，存在する今のこのときに待機し，その待機において，自己の究極の可能性へといま先駆するものは，自己の了解を，他のすべての可能性とは異なるひとつの可能性，すなわち，実存のまったくの不可能なる可能性，非存在の存在の可能性の前へと立たせるのである——この種の実存するそのことの両義性，したがってまた，存在するそのことの全体性への綜合可能の不可能さ，さらにはそれに生きるほかないこれらの矛盾におけるさまざまな葛藤や，その葛藤のもつれなど，言わば人の生きるそのことの病いの現われは，精神病理学の指摘するように，幼児の成育段階をも含め，生きることのいたるところに，存在のさまざまな時間と空間とに見いだしうるのである．

投企 Entwurf，projet とはそれ故に，生きるかぎりは，すでに事実的に投企されていながら，その実存を賭けて休みなく，終りなく投企しつづけるほかないのである——そうしてそれならば，建設することの前提としての計画 Entwurf，projet もまた，それが被投的投企 geworfener Entwurf を生きるほかない建築家の実存にかかわるものであるかぎり，その全体性においては，常にめざされているのみの可能性として，到達不可能なその可能性にとどまらざるを得ぬことになろう，建築家が人として真摯に生きるかぎりにおいては……．

人がもしも，その環境に十全に適応することを完全な，積極的な意味で健康と呼ぶものとすれば，そのような十全の適応も，したがって完全な健康もまた到達不可能であることを，デュボスは指摘する——人のめざす健康でさえも，そう言う意味では，到達不可能な可能性であって，WHO 憲章の期待するような完全な健康とは，むしろ危険な，ひとつの幻想であるとさえ言うのである．

今日の一般的，文化的状況を都市化現象として捉えるさきのルフェーヴルも，実証的諸科学の分析的な知識を断片にすぎぬとし，哲学こそ失われた全体性を恢復して，新たな都市の実現を主導しなければならぬとして，その実践的論理を展開するのであるが，そのなかでたとえば，〈生きることの全体性に〉切りはなして考えた建築は，その故にもろもろの可能性を規定することができず，建築家はしたがって，自分だけではそれらの可能性をひらくこともできぬであろうとして，今日の建築は，芸術としても技術としても，やはりひとつの方向づけを必要としていると言うのである——その方向づけはしかし，〈諸断片の〉実際的な綜合として規定されるのではなくて，わずかにその profil を見せてはいるものの，究極においてでしか実現されえぬような，ひとつの潜在性への収斂として規定されるのである——ここには，到達不可能な可能性への道程が，綜合としてではなくて，〈可能的な〉潜在性への収斂過程として措定されていて，それ故にルフェーヴルは，もはや単なる形態概念や固定観念としての都市ではなく，出逢い，その出逢いの同時性，およびそのための集合の，これらのいわゆる都市的なるものへの終りなき志向を，その〈可能的な〉潜在性としてもつ新たな都市への，実験的操作による接近 approche を提案するのである——

この実験的操作そのものについてルフェーヴルその人は，格別に深い注意をはらっていないが，しかしそれは言うまでもなく，自然科学的実験の場合とは同じではありえず，たとえば動物学的実験に関するいわゆるハーヴァード Harvard 法則，つまり被験動物たちの計算された制御 controle への拒否，などという ecological な現象をも見のがすことができぬであろうし，まして ethno－ecological な系にあっては，実験についての何ほどかの不確定性は避けがたく，人はここでもボルノー Bollnow の言うような，生の根源的な，不可避な不確定性を受けいれるほかなく，したがってその不確定性のなかに生きながら，けれども真摯に試みつづけなければならぬのであろう，それが，実存するそのことにほかならぬからである．

――ここで言う到達不可能な可能性，もしくは生の不確定性なるものは，前に ethno－ecological に設定した環境の存在世界への近似性とも，根底的なかかわりをもつものであろうが，しかしそれにしても，建設が同時に破壊であり，計画 projet が，到達不可能な綜合可能にとどまるのであれば，外的なるもの physis をそのそこに実現すべき建築家の morality はどうなるのであろうか，もしくは，意志決定にほかならぬ指し図としての設計図をつくる建築家なる profession の真実とは一体何であろうか．

バシュラールはその現象的時間，もしくは時間的現象への考察において，詩的瞬間のなかで存在は，再義性 ambivalence の状態を対立命題 antithèse の状態に，そうしてまた，同時性の状態を継起的状態に，それぞれつれもどしてしまうような，そう言う世間一般の時間をいささかも受け入れることなく，〈両義性のままに〉上昇したり，下降したりすると言い，そこで両義性と，弁証法的対立命題とを区別するのであるが，ここにはもちろん，詩の存在についての分析拒否の言明のみがあるとはしても，しかしその論理のなかで，世間的な日常的な世界での時間や事物の操作が問題であるかぎり，両義性の対立命題化による弁証法的統合，もしくは実践を可能と見なしているのではなかろうか，しかしまたその世俗世界，もしくは日常性とは，ハイデガーの言う頽落した存在性をもつものであろうか，それともそれはルフェーヴルの無記のそれであろうか．

その弁証法について，たとえばハイス Heiss は，両義性から披界 Entgrenzen への展開の動勢 Dynamismus にその本質を認めるのであるが，しかしその両義性なるものは継起的な矛盾であって，それはバシュラールの言う対立命題にほかならず，また Foulquié も，その dynamisme を弁証法の本質と見る点ではハイスと同じではあるが，しかし一方ヘーゲルの，蕾－花－実なる弁証法的展開例を単なる変化にすぎぬ偽矛盾として，真の弁証法的矛盾を同時的〈もしくは共時的〉でなければならぬと見るようであるから，これはバシュラールの再義性そのものにほかならぬのであって，これならば両義性は，本質的に弁証法的であると言えよう――これらのことを区別して言えば，弁証法における矛盾，すなわちその対立命題を，継起的と見るのがいわゆる歴史的弁証法であり，したがってそれは継起的な，不連続的変革をめざす社会的実践へと展開するのであろうし，それを同時的，もしくは共時的な両義性と見るのが論理的立場であって，それがいわゆる弁証法にほかならず，そうしてそこからの実践は，論理そのものに内属するところの倫理的要請にほかならぬのであろう．

バシュラールの詩的現象の記述にかかわらず，両義性を論証の対立命題と見なすことが可能であるならば，そうしてその場合にかぎり，その両義性の弁証法的披界 Entgrenzen もまた，論理的に可能になる――すなわち，建設が内在的に破壊であることの両義性，もしくは矛盾を踏まえつつそれを超える，そうしてやがては道元のごとくに，超えるそのことをも超えるような，そう言う終りなき披界 Entgrenzen としての計画を展開しつつ，建設を具体的に実践することが可能となるであろう，たとえそれが常に途上的であろうとも，真に具体的な人間存在の世界への移り入り，さらにはそれが ethno-ecological な系においての計画なればこそ，このような披界としての実践が，はじめて可能なのである――ここにおいてはじめて，建築家の道義性 éthique, morality が，その根拠を見いだすことになろう――人が，現位 da において，みずから存在の明るみであると言うし方でのみ，真に人でありうるのであるが，現位なるこの存在こそ脱自存在 Eksistenz の根本動向，すなわち，存在の真理のなかへ脱自的に出て行き，真理のなかに立つ，と言うその根本的動向でそれはあって，このときの，外的なるもの physis のその存在意味 poiesis のかくれがあらわにされる真理 a-letheia のその場が，すなわちまた，人のそこに住みなれたその場所 ethos，したがって人が，根底的にそのそこに帰属ずるほかないその場所の，その占有 Ereignen において ethos のただなかに立つ，と言うし方での真のその道義性においてである．

ここではも早，建設を自然に調和させるのでなく，自然に建築を適合 match させるのでもなく，あるいは景観を保存するなどと言うのでもない――そう言う対象的な自然，外在的な建築，もしくは地理学的な景観などは，これらの言明の場合，いずれも客体化され，表象化され，そのかぎりでは無記であって，無記の事象が計画の，したがってまた真に建設の過程に，そのままで入りこむことは，本来的にありえないのである――それ故に，この形式論理を超える論証の弁証法的超克においてのみ，はじめて新しい自然－環境を，新しい風景をつくると言うことが可能になるのであり，そうしてまた，このようなし方での，新しい自然－環境を，風景をつくるほかに，人間的な意味での，とりわけ今日的な状況での建築の営為も，建築するそのこともありえないのではないか――ここには，両義的な建設と破壊とを弁証的に超える水準での，建設があるのみであり建設に内属する破壊は，環境破壊としてとらえられるのでは，もはやなく，建設する当のそのことの内在的破壊，もしくは自己否定，つまり建設するそのことにおける終りなき披界で，それはあろう，したがってそれは破壊を無視するなどと言うことではない，けっして破壊を無視し，建設を武断するところには，両義性の超克や，その克服としての実践などはありえないからであって，その方法としては無記の，不確定的な，しかしその唯一の方法を弁証法的披界としての建設に，ethno-ecological な系での計画に，見いだしうるのである――したがってまた，環境が環境するとでもいうべきような，その故にこそ，そこに現前する代理不可能な，新たな自然－環境に，新たな風景の，バシュラールの言う詩的瞬間の，あの両義的な耀りが，きらめき，揺れることにもなりうるのではないであろうか．

いずれにせよ，問いそのものの立て方が今日ではも早，建設が破壊かでも，保存か開発かでもありえないことは，すでにしてここに明らかであろう．

6—可能性の領野

このここでひとまず，存在論における，したがってまた計画 projet における根底的な範疇 category と見られる　可能性　について考えておきたい——めざされている環境—世界が，みずからを開示すると言うその現存在の，諸可能性として活きて働くその領野と，構造的なかかわりをもつものと考えられるからである．

ハイデガーが現－存在を，世界－内－存在として措定するとき，その現－存在が，存在を了解するその了解において世界が開示されるのであるが，その存在と世界との同時的了解が，すなわち現位 da であって，言わば現存在がこのときその場に，現位に投げ出されているのであり，この自己に個有の存在なり，世界なりの存在可能の了解が，そのそこに投げ出されてあるが故に，それを投企 Entwurf とするのであるが，このことはまた現存在が自己の存在可能を，すでに事実的に，現存在として了解する，と言うひとつの可能性へと移しおいているからであり，ここにおいてその現位に，存在の真理としての明るみ Lichtung が生起する ereignen，と言いうるのであって，この明るみのなかへ，このようにして移り入るとともに，諸可能性の，可能性として活きて働くその領野もまた，そのそこに開示されることになるのであるから，現存在とは同時に，たとえば死への待機のような，活きて働く領野としての諸可能性そのものにほかならぬものであって，そのそこで現存在は，存在者たちの存在性を超えて，自由に可能性をえらび，えらぶそのことにおいて，自己の自由－存在を引きうけることになる——しかし，この活動領野の諸可能性のうち，自己の現存在なる可能性は，すでにしてそれが事実なる故に，も早あらためてそれを選ぶわけにはいかぬし，また死へと生きはじめるそのときに，まさしく人は，その現にあるやいなや死ぬことがはじまるのであるから，現存在において，存在可能なる存在者が開示されるとともに，この追い越しがたい究極の存在可能の可能性としての死もまた開示されるのであって，この究極の可能性を非化し，それによってあらゆる可能性を放棄する自由は，人にはあろうが，しかしそれにしてもその事実的な死のときに，このいま死につつ臨終の生死の境をさまよいつづけるその生と死との，両義的な時の経過のその涯にしてはじめて追いつくことのできる，と言うようなその可能性の究極にいたりつき，それはも早みずからそれを知り，たしかめる力もはてて，すべてが終り，そのそこにそれ以上踏みとどまる bewohnen ことも不可能となり，無が無を無化すると言うし方での無に帰し，したがって，死への存在とは言っても，それは非存在への存在であり，もしくは非存在の存在へと向かう，それはひとつの両義的な構えであって，心がまえとしてその死を，存在のこの今に待機し，自己のその究極の可能性へと先駆することにおいてのみ，自己の了解を，他のすべての可能性とは異なるひとつの可能性，すなわち実存することのまったくの不可能性なる可能性の前におくことになる——これらのことから，諸可能性なる領野が，時空の働き Zeit-Spiel-Raum の諸可能性を，Euclidean space のごとくに等質，無限，連続に分布するものでないことは明らかになろう．

このような実存において，諸可能性の活動領野に投げ出されていて，同時に待機するする人は，もしくは建築家は，みずからをそのそこに投げ入れて，その場の呼応において，もろもろの存在者たちに出逢い，それが真の出逢いであるかぎり，その出逢いにおいて，存在者たちの存在意味の現われを存在者たちに投げ返し，これらの呼応においていきいきと応答する，と言うのである——計画する projeter まさにその過程において，建築家の視野に，やはり同じように活きて働く可能的な，さまざまな imageが，みずからを凝縮しつつ，半ば容体的に，形象化しつつ，擬似対象的に立ち現われ，そのような image として，そのようなし方で出逢うところの他我なる人たちについてもまた同じことであろう——それ故に現存在での，この諸可能性の活動領野を，すなわち半ば表象的な環境世界にほかならぬと見ることが，ほぼできるであろう，そうするとその環境世界は，たとえそれが存在論的 ontologisch な措定であるにもせよ，なおそこに現存性の，住みつく存在的 ontisch な領野にほかならぬことになるであろう．

ここにおいて建築，もしくは建設とは，諸可能性の活動領野の，環境世界としての具体的な実現をめざす存在論的な技術でもあって，それにはしかし存在の，もしくは世界のさまざまな，けれども本質的な両義性を超える全体性への志向として，たとえそれが到達不可能な可能性であり，かつ終りなき道程であろうとも，弁証法的実践なる披界 Entgrenzen そのことによるほかに，その真理は望みうべくもないであろう——このここで言う可能性への志向なるその可能性とは，実存不可能なる可能性をも含め，本来それが当のその志向において，存在可能へと呼応し，あらわになるのであるから，可能的な存在として，めざされ，呼びさまされるその可能性が，存在不可能な死のそれでもありうるように，計画 projet の場に呼びもどされた外插法的な，予測可能な，因果律的な，つまり自然科学的な可能性であろうと，環境世界での事物的存在の，けれどもなお存在経験的な可能性であろうと，もしくは現存在の活動領野で，かくれつつ現われ出るその存在可能であろうと，さらには非在として思弁的に措定されうるような，そう言う想像的，もしくは創造的な可能性であろうとも，それらはいずれにもせよ，現存在においてめざされ，めざすそのまなざしのはてにめざめる可能性であり，さらにそれらのすべての根底に，めざすそのこと，すなわちまた投企 projet そのことの根源的な存在的 ontisch な可能性があり，そうしてこの根源的な可能性こそ，当の披界 Entgrenzen そのことの志向性にほかならぬのである．

またさきの事実性への立ち帰り，と言うときにも，それもまたひとつの存在可能であって，その ethno-ecological な意味での環境 ethnos の事実性，とりわけたとえば自然－環境の具体性，つまりはその自然性，すなわちまた，現象学的な意味での自然が，いわゆる所与の一義的な，事物的な自然かのように見らるる場合も，第二義的な socio—cultural な自然，たとえて言えば1910年前後のあの狂気の時に，前衛芸術の名において物神化されたさまざまな記号のような，いわゆる第二の自然であろうとも，さらには今のところなお不自然とは見らるるものの，次第に自然化しつつあるような，そう言う新たなある種の傾向であろうとも，要するにそれが知覚に直接的に与えられるかのような環境世界であろうと，またたとえば，正法眼蔵における，清浄本然たる山河大地，のような知覚の場としての自然－環境を超える虚空でそれがあろうとも，そのそこへの立ち帰りが，もちろん円環

的な回帰などであろうわけもなく，それこそ何よりもまず絶えざる披界 Entgrenzen そのことへの立ち帰りであり，すなわちまさにこのことの自然性への立ち帰りであって，この弁証法的披界の自然性，もしくは新たな日常性において，はじめて人は自然との真の出逢い，もしくは道元の保証するような無情説法の，すなわちまた天地有情同時成道の，そう言う真の出逢いが現前するのであろう．

すなわちそれは現存在が，配慮しうる諸可能性へ，もしくは諸事象へと，現位 da に立つまさにそのことにおいて，これらの出逢うものへと決意し，その決意のうちにたもちつつ，かつ移しうごかすその至高の瞬間に——ほかならぬ現在がそのそこに湧きでると言われる，その至高の瞬間に——その極みでの，そのつどの自然への呼応であり，立ち帰りにほかならぬのである——そうして時間とは，バシュラールや道元の言うように，まさしくこのような至高の瞬間にほかならぬのではないであろうか．

7—ethnos に住む

建設する　とはしかし　何を　であろうか——それはこのような存在論的な，けれどもなお存在的な環境世界を，であろうか．　または　ethno-ecological　な系での自然－環境とは何の謂いであろうか——ボルノーは，現代人の存在恢復を，被護性 Geborgenheit の，もしくは安らぎの場面としての故郷にそれを求めようとする——哲学の歴史においては，今世紀での決定的な成果とされている現象学的存在論，すなわちまたいわゆる実存主義によって，今日までのまことに長い時の間の人みずからの弱さのつくりあげてきた幻想の砦がつき崩され，人は，はじめて真のおのれに立ち帰るべきことを悟ったのであるが，そのせいでしかし，これまで人の，人であるそのことを支えてきた当然のこととして，かつて疑われもせずにきたいっさいの生の連関から引きさかれて，人はいまや，実存と呼ばれるあの究極にして深奥な無の核心，もしくは核心の無へと投げ出され，も早のがれるすべない孤独にいて，しかもなお空しく救いをもとめつづけるほかないものとして，それを嵯くボルノーにとってはしかし，だからと言ってこの実存主義から眼をそらせ，それをよけて通るようなどのような便法も，それに代わる真理もまたありえず，したがってそこに救いがもしあるとすれば，それは実存主義を内在的に超えるほかなく，それによってのみ，喪われてそれらの諸連関を人にとりもどし，そこに故郷 Heimat を，存在の基盤 Boden を，〈本来的に人の住みつくその場所 ethnos を〉，恢復しなければならぬのである．

——ボルノーは，現代人がねぐらなき旅人 homo-viator の境遇に追いつめられ，〈死ぬべき場所すら知らずに〉放浪するほかないと言うのは，強制された日常の生における存在の基盤喪失，すなわちまた故郷喪失によるとして，人であることへの復権のためには，実存主義を，まさしくその地点で克服しなければならぬとする——これらの解釈はまことにこの通りではあろうけれども，実存主義はしかし，これらの頽落的存在者を告発したまでであって，それをつくり出したわけではない，それをつくり出したのは，人みずからであり，その現代的状況そのものにほかならぬのである——人は本来的に，ほろびを知らずしてしかも絶えざる衝撃 Andrang にほかならぬ自然の自己開示のその場に居あわせ，そこに住みこみ，考え，話すことを委ねられ，かつそれらのすべてを引きうけざるをえぬような，そう言う自然な存在でありながら，ほかのどのような諸事象ともまったく異なるただひとつの事象，すなわち遁れるすべない自然の死においてのみは，そのそこでも早，自己を完成することもできぬような存在にすぎず，したがって人は，自己なる全体としての存在の故郷 Heimat をめざしながら，しかもそこに到達しえぬと言うような，何か不気味なもの Un—heimlich——heimlich でありながら，同時に heimlich ではないと言うほかない存在として，ハイデガーは，故郷喪失の契機を存在の始源におくのであるが，一方またその故郷喪失が，いまや世界的な運命になり，それと言うのも，それが技術社会での〈類型的な〉思惟形式や，そこでの〈強制された，したがってそれだけに安易な〉日常生活における人たちの，その〈不可思議な〉存在放棄や，または存在忘却によるものであるとし，そこでその存在恢復のために，実存すること，人であることを真に生きるそのことにほかならぬ　住む　ことを学びなおさなければならぬと言うのである．

そのハイデガーの存在論的解釈によれば，建てる bauen は古代語の buan を祖語とするものであって，それが，滞在する bewohnen を経て，住む wohnen に，一方その同じ語幹から，私がある ich bin，あなたがある du bist などの　有る，存在する sein の人称変化としてその痕跡をとどめているところの，わたしや，あなたが存在する，そう言う　存在する　にそれが本質的にかかわると言う——また　住む wohnen　は，goth 語の　とどまる　wunian　にもかかわり，その wunian は現代語での　満足している zufrieden sein　であって，したがってそれは　安らいでいる，もしくは　安らぎにとどまる　などの意味があり，安らぎ Friede そのものは同時に，危険や威嚇から　防護されている　ことを意味し，これはまた，囲いをする umfrieden に今もその原意をとどめてもいるように，いたわられてあるもの das Geschonte をも意味し，したがって　住む　の根源的なありようは，いたわる schonen そのことにもあると言う——さらになお，ほかならぬ動詞の　有る　もしくは　存在する　sein　が，bin，bist にとどまらず，ist や war などと不規則に変化するのは，それが語幹の複合によるものであって，それは印欧語の bhû，bheu，es，wes であって，そこから　現わす　生きる　住む　の真理 aletheia がみちびき出される——ここにおいて　存在する sein　生きる leben　住む　wohnen　建てる bauen　とどまる bewohnen　囲う umfrieden　いたわる schonen　ならびにそれらの真理を現わす a-letheia　の根源的な意味連関が明らかにされてくるのである．

——これらのことから，ヴィトルヴィウス所引の断簡の　意味するもの guod significat としての建築なるもの physis の，意味されるもの quod significatur としての建築的なるもの idea を　検証しつつ〈かつそれらを〉あつめる logos　そのことにはじまる建築論は，いまや　意味する significare，signifier　における　意味するそのこと signifiant　のその　意味作用 poiesis，signification　をあらわにする　技術　techne　として　建てる bauen を敷衍し，それが意味作用するその　意味 signifié　として　住む wohnen をあらわにする lego へ，そう言う存在論へとみずからを開かなければならぬのではなかろうか——言うまでもなく，ここでは，可能性の有の地平においてでそれはあるが……．

そうしてこれらの意味連関からボルノーは，人は本質上　住む　ものであって，それはしっかりした場所にとどまることであって，それには人為的に築かれた壁によってその場所を囲い，威嚇的な諸力からこの場所を護ろうと努め，そうすることによってこの場所にとどまることに順応するものである——人はただ　住む　ことによってのみ　存在する　——人はただ単に，空間にかかわりのない主体として，そうして人とはかかわりのない空間的世界のなかにおかれている，と言うような，もしくは空間が，人に対して，きわめて皮相な関係しかもたず，人は，そう言う空間の任意の場所におかれている，と言うような，そう言うそれらの意味で，人がそこに投げ出されている，のではなくて，人は，建てながら，建てるそのことにおいて，自己の空間を創造し，創造しつつその空間を形象化することによってのみ，真に存在することができ，もしくはその空間を，諸可能性の活動領野として実現し，言いかえれば，実存を生きる生活のその空間としてそこを　たもつ　ことによってのみ，人は，自己の存在を実現しうる，と言うような，そう言う意味で，そう言うし方で，人は世界のなかに投げ出されているのである——ハイデガーの場合，空間とは——本質空間 Wesensraum と呼ばれるそれは，もちろん表象的空間などではなく——世界の開けのなかで，思惟なる開けにおいて，立ちあらわれるのであり，その世界の開けとは，ほかならぬ現-存在の現位 da を意味するのであり，また，同じように家もしくは建築が，所与のある場所に出現する，のではなくて，家〈もしくは建築〉において，〈その　建てる　もしくは　住む　において〉場所が，場所として成立する，と言うのであるから，そのかぎりではボルノーのあれらの解釈は，この具体的な敷衍として，それを納得することができよう．

Zutt の　住む　ことは，ひとつの　住まい　をもつことではなく，存在の本質にかなうひとつの空間のなかに一人で，または家族とともにいて，その他のすべての人たちからは離れていることである，と言うのを，ハイデガーの　住む　ことの本来的な，真の困難さは，単に　住まい　の欠如にのみあるのではなく，それは，死への存在として住むことを，まず学ばなければならぬそのことにもとづいている，とするのに照校してボルノーは，　住む　ことを学ぶと言うのは，安らいだ気分でこの空間に　定住する　ことの必然性を理解することにほかならぬと解しているが，しかしこれはいささか附会の説ではなかろうか——何故なら，ハイデガーは，ここでは何よりもまず存在の恢復を　住む　の根源性とするのであろうし，また Zutt の　住む　は，まず単独者 Einganger であることをめざすものにほかならぬであろうし，Vietta は一方ハイデガーの，現-存在こそ人を深く基礎づけ，それとともに高くもささえあげるのである，を引いて，今日の人が現位 da なしにある，のに対して，未来の思惟においては，存在における人の故郷としての現位 da が，真に人間的なるものを言いあらわすしるしになっているであろう，と言うのであって，この方がボルノーよりも，むしろハイデガーの言う　住む　ことの難かしさを言いあてているに近いのではないか．

ボルノーはさらにミンコフスキーをも祖述し，〈場所に〉親密さ intimitéの印象を与えるためには，そこに不断に住んでいること，なつかしみ，いつくしみつつそこに住みトドまっていることの，何らかの，それとさとりうる証拠〈physis　なり　poiesis〉が必要であるとし，さらに別なところでは Zutt を引きつつ，住まい Wohnung と慣れ　Gewohnheit とが同一の語幹をもっているのは，偶然のことでは決してなく，住みなれた　住まい　のなかで，人は，最高の空間的被護性をもちうるのであるとし，生におけるすべての安らぎ，もしくは安全さもまた，すべてこの空間的被護性と直接にかかわるものであることを指摘することもできようとして，あたかもこれらの馴れの日常性にその安らぎを見ようとしているかのようであるが，しかしボルノーその人は，日常性における存在忘却からの人の復権をめざしているのであるから，このことで，不安と安らぎ，馴れと変革，日常性と非日常性などの，存在の本来的な両義性について，さらにはそれらの両義性の克服における安らぎや，またはその新たな日常性について追求しつづけるべきではなかったであろうか——しかもそこに紹介されているかぎりでのミンコフスキー説は，不可測的な空間の広さへの陶酔と，同時にその不安感の指摘，開放されている屋外での親密感を得るためには，そのそこが，樹木か何かで囲われ，隔離されていることが必要であること，さらには部屋の形成について，ある程度の広さとある程度の狭さ，ある程度の装飾とある程度の単純さ，それからそこへの馴れと同時に，そのつどの一回きりの目あたらしさ，また人の出逢いの集まりについて，あまりにも多人数ではなく，と言ってもひとりや，二人でもなく，などとそのほとんどが両義的な要請であって，その両義性を全体的に統合するものとして，やや漠然とではあるが親密さや，人間味や人間性をもち出すように見うけられるのである——これらの点にかぎっては，ミンコフスキーに一方では，九鬼周造の，いきの構造のその　いき　の存在論的分析や，前にふれたバシュラールの詩的現象の記述などを想起するのであるが，けれどもこれらの諸説のそれぞれの帰趨は，言うまでもなく，それぞれの思惟の定位と方向づけにしたがって，それぞれ別な道程をたどるのであるが…….

ボルノーはひきつづき〈住む〉ための空間に要請される秩序感〈空間構造〉や，中心感〈centrality〉や，境界の重要さなどを述べ，その際にも農耕民的定住と，遊牧民的放浪とを対立概念として捉え，そこでは一方で，定住民の日常性の馴れに対して，他方では，遊牧民の更新性についてそれぞれを批判し，そうしてしかし，住む demeurer そのことに欠くべからざる更新性を明確に指摘するのである——この　住む demeurer　においてはそれを，時の流れにおける人の立場の獲得，としてボルノーは，時間のなかに定住すること，そうしながらそれを超えたところでのみ，超時間的なものとの現実的な連関がつくりあげられるのであるとして，流れと停滞との弁証法的な統合を，そこに見ようとするかのようである——ポンティが，存在することの全体性を，世界に住む，時間に住む，もしくは身体性に住む，のその　住む　に見さだめるのに対してボルノーは，これらの　住む　にかかわる根底的な諸問題に，それ以上に深入りすることなく，それを空間にかかわる諸問題に移して，そこに家〈建築〉を考え，その考えを村や，おそらく都市や，そうして明らかに故郷にまで拡大し，そうしながら人が故郷と故郷喪失，所有と喪失との二面性のなかにはめこまれていることを指摘する．

故郷とは，デュボスによれば，個人が生物学的，および社会-文化的機構を通じてそれに適応し，自分の属する集団の伝統と，個人的経験を通じて，

感情的にも一体的なものとして，そこに融着しうるあの環境のことであって，それは単なる自然の場所であるよりも，むしろ過去の経験の累積の確認される土地である，とこれは寔に明快であり，むしろ科学的でもある定立ではあるが，しかしここでは 存在する sein, 建てる bauen, 住む wohnen, とどまる bewohnen などの，生きる leben そのことの根源性のどのひとつともかかわりなく，それは単なる生物学を超えようとするものではあろうけれども，なお一面的にすぎ，要するにあまりにも ecological につきすぎると言うべきであろうか——ボルノーはしかし，家，またはわが家が，個々の人，もしくは個々の家族の，仕切られた私的な居住領域であり，人が，〈外での〉 職務やその他の仕事から日々に立ち帰るべき， より狭く，かつ護らるべき領域であるとすれば，故郷とは，人の全体的な生が，その生のもろもろの連関をそこにともなっているひとつの，より大きな共同体のなかにまったくはめこまれているものとして，それが成就されうるような，そう言うより広い領域である，として家の場合とまったく同じように，人は，そのそこに住みながら〈それを故郷とし〉，故郷のなかで自己を築きあげ，それによってのみ人であることができる，とむしろこのここではハイデガーの正統を，たしかに履むもののようである——すなわち故郷とは，ここではも早，まぎれもなく個有の人，土地，歴史，文化などの包括概念としての ethnos，したがってそこにこそ，本来的に人の住むべきその場所としての ethnos，にほかならぬのではなかろうか，そうしてまたそのそこにして，のちにのべるハイデガーの天地神人なる Geviert もとどまり住むことができるのではないであろうか——ボルノーはしかし，家の場合における空間的秩序についての指摘と同じようにして，故郷もまた，人の生育した一定の地域的環境，と言う空間的概念であるにとどまらず，人がそのそこにいて，そこで故郷なるもの，ふるさとを感じうるような，そう言う生の感性的な構成の全体を，さらには人のその身に住みつき，すっかりなじみきっている生のすべての連関に，つつみこまれ，まったくひたりきっているその生の全体を，故郷なる存在の領域が包括している，とするのであるが，しかしそこにとどまり，それ以上にそのそこに，存在の明るみ Lichtung， 世界の開けを見ようとはしていない——ボスに批判されるビンスワンガーのように…….

ethnos はしかし，あとでのべるように，世界の開けであり，ethnos の風景こそは存在の明るみにほかならぬのである．

故郷喪失とはボルノーにとって，根源的な生の支えなる諸秩序からの離別であり，追放を意味するのであるから，地域的環境なるものは，存在にとってむしろ必ずしも第一義的なのではなく，したがっていわゆる第二の故郷と呼ばれるような故郷もありうるし，遊牧民にとっても，さらには船を住まいとする船員にとっても，それぞれの生の場に故郷が形成されることもありうるのである——生の安らぎの根拠を，ある程度の馴れをそのそこに見こみつつ，故郷なる環境世界に設定しようとするボルノーにとって，現存在の活動領野の諸可能性のうち，ある種のものを構成的に，言わば束ねあわせ，それによってもとのままではとりとめなく，不確定な，したがってまた不安な選択の諸可能性を限定し，その領野をそれによって分節し狭め，束ね狭めるそのことによってそこに意味を充実させ，そのようにしてそのそこを安らぎの空間たらしめようとすることは，まさしくそこに馴れと言うある種の存在忘却へとさそうその安らぎ，たとえそれを新しく被護性 Geborgenheit と呼びかえようともそう言う懼れをもつ安らぎに，存在の恢復を期待しようとすることは，たしかに安易の論にすぎ，しかしそれにしても，それはひとつの救いではありうるであろうと言うほかない，そうしてそれは，まさしくひとつの福音にほかならぬのである——実のところ，いま生に向かって叩きつけられている情報群の terrorisme のもとで，選択の可能性の無限定さを，あたかも生の充実の豊かさと取りちがえるような，ルフェーヴルによればひとつのたくらみの効果にほかならぬ傾向が，一般的に見られるからである——ボルノーはそうしながらも，ここにもまた二重の危懼，すなわちひとつには定住者としての危懼，つまり，生の脅かされている状況におかれていながら，それに向けては目をつむり，小さな，かぎられた組織のなかへと癒着してしまうような，そう言う俗物性への傾き，もうひとつには，故郷への存在のつながりを見失い，そのそこに定住も，死すべきことをも忘れはて，そこでおのずからその存在感，生の充実感を霧散させてしまっているような，そう言う無謀な冒険性，とを指摘するのであるが，ここにおいてもこれらを単に二面性として捉えるにとどまり，そこでこれらの二面性での実存的不確かの代りに，不変の確かな択一がありうるわけではなく，むしろ取り返されたその故郷が，この二面性のそのことによる不断の緊張感の上にこそ維持される，とそれらを対極的に定立するのであるが，これもまた存在の本来的な両義性，したがってまた実践的に克服さるべきその両義性にほかならぬのではなかろうか——前にのべた環境の具体性への，現存在から，同時に構成的世界からの，この両極的な立ち帰りなるものも，ここにおいて，環境そのものの本来的な両義性を，両義性のままに見ているのであって，そうしてそれは全体性において超えらるべきものなることは言うまでもないであろう——このようにして，取り返された故郷にとどまり住むその定住者たちにも，言うまでもなく定住性と，同時に冒険性もあるであろうし，そうしてこの両義性こそ実存の言わば故郷にほかならず，のみならずそこには，そのような意味での実存を生きる時間も，そうではなくて存在放棄の時間もまたあり得るであろうが，しかしそれは，馴れのいわゆる日常性に埋没しての存在忘却，を意味するものではも早ないのである——それにもかかわらず，これらの両義性を，同一律的に対極的に定立することは，ほかならぬ両義そのものの内在的葛藤なるその緊張感，しかもこれこそ今日の被害者意識での不安感，危機感なるものを，あたかも加害者意識でのある種の生命力 élan vital にすりかえることになりはしないであろうか，そうしてそうすることによってまた，バシュラールの指摘するような，両義性が両義性のままに，いわゆる gestalt-free な存在表現でありうるような芸術性を見のがし，さらにそれは，実存の全体性への志向と言うもっとも根源的な生における，その両義性の実践的克服としての，真の安らぎを隠蔽することにもなりはしないであろうか——その定住者のいわゆる日常性についてのボルノーの批判もまた，それが非日常性に対して単に相対的，対極的に指定されるかぎりでは，前のルフェーブルの，日常性から出発して，日常的なるもののただなかにおいて，日常的なるものをのりこえなければならぬとするような，そう言う実践的克服の，それが契機とはなりえぬであろう——休みなき，終りなき自己否定を日常化すると言うこと，それのみが馴れのいわゆる日常性を，日常性において真に超えるそのことにほかならぬであろう．

ハイデガーが，建てる〈耕やす〉 bauen ととどまる〈馴れる〉 bewohnen

との両義を，住む wohnen の根底に見さだめるのは，それによって　存在する sein，現わす aletheia，生きる leben　などとともに，　住む　の根源性におけるその両義性と，その故の全体性への志向の可能性，ならびにそこへの到達の不可能さなどを，同時に両義的に，多義的に示唆しようとするのではないであろうか．

ハイデガーが，死に向かう存在としての現-存在　Da-sein　を措定するとき，そのような存在としての人の　住む　ことの困難さを指摘するのに対し，ボルノーはこの困難さを，定住するそのことの安らぎに見，もはや手にすることのできる〈具体的な〉何ものの存在しない今，そう言うたよりなさ，とりとめのなさへのかぎりない没落に抵抗しようとして，あらためて人を，ふたたびこの世界の有限な，確かな具体性のなかに基礎づけること，それとまた，強迫的な，さまざまな外からの，もしくは〈下意識なる〉内からの力に対抗するために，確固としてゆるぎない立場を，人に構築させることを不可欠のこととして，具体的に定義しうる故郷の建設を提唱するのであるが，その故郷を，それは経験のさまざまな水準での意味のその重複においてではあろうが，それを経験的な空間に変換し，それによって故郷への実際的，技法的な接近をはかろうとするのであって，人の生が，生の存在的な秩序そのものによってその生の空間を形象化し，同時にそれに意味を充実しつづけてきたのであるから，まさにこの事実によってその逆もまた可能なはずであるとし，すなわち具体的に形象化され，やがては実現される生の空間が，〈先駆的に構成的な〉その生の空間的秩序にもとづき，それによって空間における生に意味を与え，充実し，生を，その意味において保持すると言う――このようにして生の空間，もしくは空間としての故郷を，先駆的に，構成的に主導する生の空間的秩序，もしくは生の秩序全体の空間性とは，ボンティの身体図式のような，表象的記号に類するものでなければ，何であろうか，またその空間のみならず，故郷やまたはその建設などに，あるいはもっとも根源的には，人の　生きる　そのことにひそむ諸矛盾の，その両義性をあらわにし，そうしてそれを，全体性への志向において超えると言う実践的，論理的方法をたどらなかったのは何故であろうか，ほかならぬこの実践的論理においてのみ，ボルノーの言う経験的空間としての故郷，もしくは ethnos の空間化もまた，その技術の全体的，具体的な根拠を見いだしうるにもかかわらず……．

Vietta はすべての価値，たとえば善と悪，堕落と救済，伝統と暴力とかのこう言うさまざまな価値のすべてがただひとつのことのために，すなわち存在忘却のために，いまたよりなげにその影をうすくしてしまったとして，その存在忘却からの恢復によってのみ故郷喪失の克服がはじまりうる，人の日々の生のみならず，人の本質までもが，今その故郷を喪失してしまっているからである，を援用するのであるが，ここにおいてまさしく故郷の，真に所在する場所がどこであるかが，はじめて明らかになるであろう，すなわちそれは，いわゆる故郷と，存在の故郷との，本来的には不可分な二つの場所にほかならぬのである――そうしてこの故にこそハイデガーが，空間とは世界の開けのなかに立ちあらわれるのであり，世界の開けとは，つまりは現-存在を意味する，と二にして一なるその場所の場所性を指摘するのであろう，どこまでも有の地平においてで，それはあろうが．

――ボルノーを，前のデュボスの故郷にくらべるとき，ハイデガーの，自然，歴史，空間についてのもろもろの実証科学は，存在するものの全体から，それぞれの対象領域を〈切りとり，それを〉手に入れてくる，これらの実証科学は〈このようにして切りとられて〉存在するものへ直接に立ち向かい，その総力をあげておよそ〈このようなし方で〉存在するすべてのものの研究 Forschung を引きうけようとするのであるが，哲学は古代以来，そのように〈切りとられて〉存在するものを，あれこれと規定しようとするのではなく，むしろ存在するものの　存在する　有る　について，つまりその存在に関して理解しようとしてきたのである，と言うときの，その実証科学と哲学との区別を想起し，さらには，言葉に代わる記号の氾濫のような今日的状況についての Vietta の，これらのことは，とりもなおさず人としての人を，人であることを拭い消すことを，意味するものである，と言う批判をも思い浮かべるのである――ここにして，生物学にその根をもち，心理学，社会学にその枝葉をひろげる ecological な概念なり，その操作をもってしては，存在の全体性の恢復については言うまでもなく，故郷喪失の克服もまたおぼつかないと言うべきであろうか．

それ故にボルノーの，家や故郷の再建の提唱は，それを実存主義の克服としてではなく，実存の復権への具体的な要請として，少なくともそれへの福音として，注目されなければならぬであろう．

8—ethnos の風景

住む wohnen についての，ハイデガーや，ボルノーの，建てる bauen や，とどまる bewohnen の両義的な意味連関は，古代日本の　住む　には稀薄であるように思われる――ただ　住む　と　生きる　とは，時には別のし方でそれはあったが，たとえば中世的思惟において，ともに　無常なるもの　と見られていて，そう言う否定的な地平の無において，やはり根源的なつながりを認めるべきであるかもしれない．

住む　もしくは　住まい　の　ス　は，たとえば古事記の国ゆずりの章の，火鑽りの詞の，とだる天の，新巣のすすの，やつが垂るまで，のその新巣の　ス　であろうし，　イ　は坐イマス，家イヘ，盧イホなどの　イであろうから，古代の　住む　や　住まい　の観念は，鳥やけものの　巣にいる　そのことに由来するものであろうか――しかしその巣が，生物学的に見れば，種の維持にかかわる ecological な飼育の場にすぎぬであろうが，人は，巣だつことのできぬ巣だつものであり，巣に坐っているほかないものでありながら，巣だつものへと開かれた存在として，生まれると，Portman の言うように，本来それは一時的な場の仮構であり，しかもなお両義的な，実存の場にほかならぬ，したがって，発生的な　住まい　に，もしくは古代日本の　住まい　の観念のうちに，堅固な囲いや，護りのための積極的な装置も見られず，したがってそこに安らぎとどまる意識も，さらにはそれを建てると言うような営為の積極的な意志も見られなかったとしても，それは〈東洋的な〉人にとって，もしくは本来的に，人にとって，むしろその方がより自然なことではなかったであろうか――そう言う意味では，言わばそれはハイデガーの，家が所与のある場所に出現するのでなくて，家において場所〈空間〉が，場所〈空間〉として成立する，と言うその家〈建築〉の原初的形態をそこに見うるのではあるまいか．

またその　囲い　については，古代語の　罪ツミ　は包むツツムであり，それに対する　赤き心　のその　赤アカ　は，明るし，開けるの　アカ　であると言う——古代人の空間感情は，ひとまずここで明らかになろう，したがって当時の人たちは，たとえば佐味田出土の鏡背元様の家屋の verandha の造作に見うるように，屋内よりも屋外を，また貞観以降，今日になお伝統される　住まい　の開放的な空間構成に見らるるように，囲うよりはひらくことを，暗さよりは明るさを，そうしてしかもその明るさを単なる明るさとしてではなく，明るさよりもむしろほの暗さを　ココロニクシ　とするような，そう言う paradoxical な存在意味の両義性を，両義性のままに了解し，もしくは黙認することになるのであろう．

阿倍川の氾濫に崩壊した登呂のその遺跡に見られるように，もしくは灌漑用水の地底に沈められた唐古遺址の幾層かの集落にも知られるように，古代日本の，このような　住まい　は，神かけて堅固にまもらるべき営為では，必ずしもなく，底つ岩根に宮柱太しき立て，と寿詞されるその　御屋ミヤ　でさえ，伝飛鳥板蓋宮の発掘遺址に，格別の防柵が見いだされてはいないのである，しかもその　宮ミヤ　のありどころなる　都ミヤコ　でさえも，しきりに移り行く，言わば仮りの　住まい　にほかならぬ，そう言う時代に，氏族の運命をかけてまで堅固に護らるべきものが，もしもありえたとすれば，それはおそらくは　国クニ　ではなかったかと思われる．

国とは，原初的には神を祀り，支える同族的集団と，その集団の耕作する　田タ　との総称であって，その集団はまた　氏ウジ　と総称される血と土との伝統にほかならぬ同族の　ウカラ，もしくは　ハラカラ　に，ヤツコ　と呼ばれる　ヤカラ　が加わり，その血と土は　クニタマ　と呼ばれる個有の土地神によって守護され，さらには　ウヂ　の成員によって耕やされ，その　ウヂ　に属する　田アガタ　の，その飢穫を掌握する多くの自然神が，時空のおりおりに現われ，隠れつつそのあたりに住んでいたのである——　住む　にかかわる　建てる　の bauen が，本来　耕やす　ことにほかならぬのであるから，そのことからすれば，この国にこそハイデガーの，住む wohnen，耕やす bauen，とどまる bewohnen，存在する sein の意味連関の，まったき適合を見うるのではなかろうか，そうしてこれこそ，天地神人 Geviert の統一して住むべき場所としての，個有の土地，人，文化，伝統などの全体としての，その ethnos ではあるまいか．

ハイデガーは，存在の本質を，死へと生きる人が，天空の下，大地の上で，神的なるものと向きあって　住む　ことであるとして，この天，地，神的なるもの，および死すべきものとしての人を，そのそれぞれの生起においては相互に反照しながらも，しかも　ひとつの全体として　緊密な統一を保つものとして，それを Geviert〈天地神人・四者生起〉と名づけるのであるが，家はその Geviert に場面を，まさにその四起合成 Geviert の現成にほかならぬものとしての統一の場面を，そのように整え einräumen ているのであり，したがって家は，そのようなし方での，Geviert の護持であり，同時に Geviert による被護であって，ここにおいて　建てる　の本質は，それ故に　住む　の空間化なる家をつくるそのことにおいて，そこに同時に Geviert を整え住まわせることにほかならぬ，とするのである，古代日本の　住まい　にではなくて，ethnos としての　国クニ　に，ハイデガーのこの家を見るべき理由が，ここでも明らかになるのではなかろうか．

出雲風土記の国びき章や，その国びきの語り詞の，しもつづら，くるやくるやに，河船の，もそろもそろに，くにこくにこと，引き来縫える，のその　国来クニコ　クニコの語感などから見れば，国はひとつひとつのまとまりであって，それはおそらく人と，土地とのひとつのまとまりを，図の地とするもので，その土地に　ヤマト　ヤマシロ　キノクニ　などと呼びならわすような，そう言う地形や地物の自然による境界も，おのずから認められているのであろうが，その国に事物的な囲いを設けることなど，もちろんほとんど不可能であり，ただしかし　占国シメクニ　を象徴する標示シメは，国中クニナカのいたるところに，とりわけ　アガタ　の四隅や，おもな道筋の　国界クニザカヒ　などには立てられていて，それらはいずれも，たとえば万葉集の，紫野ゆき標野ゆき，野守は見ずや君が袖ふる，の標野や野守に見らるるように，まもらるべく，犯すべからざる taboo の場の象徴的な隔離の，それは標示であり，したがって聖性をもっていたのであろう——この　クニ　に豊饒儀礼にほかならぬ　国見クニミ　が行なわれ，それは典型的には姿よく，見はらしのよい丘にのぼって　クニ　を見やるのであって，このときの　寿詞コトホギ　が　クニホメ　にほかならぬのであり，そうしてそう言う人目をひく丘には，やがて神々が　降臨アモリ　することになって，国見はここで神や神人の行儀として伝承されるようになるのであろう．

常陸風土記の，倭武天皇の国見には，物モノの色，可怜オカしく，郷体クニカタいと　愛メヅらし，とあり，この郷体は，出雲風土記の方結郷の，吾が敷き坐せる　地クニ　は　国形クニカタ　宣し，の国形でもあり，したがって，parole の　クニ　は，écriture としては ambiguous な土，地，郷，国のいずれでもあり，しかもここでのこの古代語の　モノ　とは，事物とその事物にやどる聖性との両義であるから，これらの　クニ　の多義のそれぞれが，いずれもまた聖性をたもち，その聖性への参与にほかならぬ国見において，見らるる　モノ　は，それ故言わば神聖な景色ケシキであり，　見る　もまた単なる　ナガメ　ではなく，それは出雲風土記の山国郷の，この，土クニは止まず見が欲し，の言わば忘我の　見る　であって，その忘我 exstasis の舞についての Vietta の，それが現実から舞い出てしまうのではなく，現実への舞いいって行くのである，とするそのような忘我の　見る　であり，したがってそれは，その景色の聖性への，もしくは聖なる景色への被投であり，同時にそれは　気色ケシキ　としての景色への投企にほかならぬ——現-存在に開示さている存在者を支え，それを存在者たらしめる働きなる大地と季節こそ，存在の本質的な空間であり，時間であるとするときの，その時空の働き Zeit-Spiel-Raum こそ，景色をあらわにし，気色を明らむる当のその働きにほかならぬのであるが，働きとしてのその季節が，その場に移ろい行く光として，大地とともに存在の明るみ Lichtung を生起せしめ，そこに，存在の故郷を現成せしめるのである．

——諸可能性の活動領野としての環境世界，そのそこにのみ，人の真に住みつくべき故郷 ethnos は，外的なるものかのようにして，そうしてそれ故にまた，それにも住みこむべきものとして与えられるかのような，そう言う季節の働きにおいて，日々に刻々に移り変わるだけではなく，そのそ

こに真に住む人の，その　住む　における休みなき，終りなき実践的披界においてもまた，それは絶えず変わりつづけるのであるが，この二重の変化を主宰するのが，みずからを整える Geviert であり，したがってまたそれは，全体としての ethnos であって，それをあらわにするのが，すなわち時空なる働きにほかならぬ——景色，もしくは気色は，このようにして，その隠れから立ち現われ，したがってこれらの風景こそ，ともに二にして一なる故郷 ethnos の，もっとも故郷的なるものであると言えようか．

国見クニミにおいて開示されるのが，すなわち，季節なる光に充たされたその　国クニ　なる世界の　景色ケシキ　であり，それを　国衆クニヒト　は，その時の　気色ケシキ　において　故郷クニ　として了解するのであろう．

結

このようにして生活環境の構成とは，根源的な故郷 ethnos の恢復であり，それは Geviert としての場面を整えるそのことであり，そのような意味でのクニゾクリにほかならぬのであって，その　ケシキ　なる風景とは，この　クニ　の明るみに開示される景色であり，その気色としての了解にほかならぬであろう，そうして時空の働きが，これらの二にして一なるものを現前するのである．

そうしてまた，その建設やその計画なるものも，根源的には，可能性志向としての終りなき実践的披界でなければならぬのである——たとえそれが到達不可能であろうとも，人は，その実存においては，常に計画 Plannung の不確定性に生きるほかないのであって，しかしながらこのことは，それが生の責任を回避し，もしくは懶惰にその口実をゆるすものでは，決してなく，計画や，予期 Vorsorgen のすべてをつくし，自己の生そのものの自己実現のために，その可能性の究極を，真摯に追求しつづけなければならぬ，とするボルノーの，その実存的な言明を銘記しておくべきであろう．

建設するとは，生活環境を構成するそのことであり，それはまた風景をつくるそのことでもある——この一見して聞きなれた言明には，しかしここに参考した諸先学のみならず，その他の，人の全体性の復権をめざす人間学や，存在論のさまざまな体系が肯定的，もしくは否定的に内包されていることは，すでに見られるとおりであり，そうしてそのような思惟なくしては，建築家の　建築する　そのこと，もしくは建設することを通じての他我への，環境への，もしくは世界への，今日的な適応も，したがってまた未来への寄与もありえないと思われる——建築家のみが，もしくは真の建設者としてのみ人は，存在の恢復，人の復権をめざしうるからである．

ここにして，Vitruvius 以来の建築家の profession の本質を，あらためて見なおすことになるのではなかろうか．

生活環境構成要綱

あわれむべしかれら，念慮の語句なることを知らず，
語句の念慮を逸脱することを知らず
——正法眼蔵，山水経

一般的考察

1

この事物的世紀での，人の生活環境が，何時まで，食い，眠り，繁殖するのみの，それさえも不十分な，鶏舎のごときものでありつづけるのか

2

なぜそれは，飢えで，病いで，老衰で，公害で，戦争で死にゆく，まさにそのものたちの生活の環境であってはいけないのか

3

生きる人の生活環境は，世界を生き，歴史に住み，現-存在なる現位 da に立ち，死にゆくものとして住まう，そう言うしかも，存在 Sein と当為 Sollen との相対，もしくは両義性を内在的に，実践的に超ゆるところでの　真の　生きる　の世界として，建てられねばならぬ——それを，人間存在の本質的故郷 ethnos，と呼ぼう

4

人は，現-存在なる明るみにおいて，いわゆる故郷 ethnos を了解し，その脱自態なる内世界，もしくは環境世界と呼ばれる活動領野で，呼応的に諸可能性に出逢う——この出逢いが諸可能性を，そのつど，他我の実存において，もしくは一般的に，道具性において，または事物性において，それらを存在意味としてあらわにしうるのは，その出逢いが，環境世界での先駆的な呼応，すなわち，真に適応的な応答にほかならぬからである

5

環境世界は，それ故に言わば，それらに先きだつ，可能的な存在諸意味に充たされた，時空の働きの場 Zeit-Spiel-Raum にほかならぬのであるが，ひとつひとつの存在意味は，可能性として半ばは隠れ，この出逢いにおいて，そのつど呼応しつつ立ち現われる

6

いわゆる人間と，その存在本質との両方の，この二にして一なる故郷 ethnos も，その脱自態なる環境世界もまた，全体として，それぞれ可能的なひとつの存在意味であるが，その意味は，実存において開示されるのであって，それは諸意味の総和ではない——諸意味から，全体としてのひとつの意味へと，構成的に向かうには，それらの諸意味の否定的媒介による弁証法的超克として，その可能性にせまるほかないが，それにしても，そこへの終局的な到達は不可能である

7

建設者として人は，まずみずから現位 da にたち，その実存の活動領野において，捜査的な身体図式に，構成的に呼応する諸意味の自己発現をめざす——諸意味はこのようにして，時空の働きの場に立ち現われ，みずからをそのつどの場面に定位しつつ，全体の構造を予兆する

8

存在者は一般に，故郷 ethnos においても，環境世界としても，時性を可能的地平とする故に，本来的に仮構的 temporal である——それらの先身体的捜査も，実存的操作も，それらの捜査を通じての計画も建設もまた，同じことであって，この時性を外挿法的な，もしくは未来予言的な時間的変化と見あやまるべきではない

註：1968年 8 月15日から 3 日間，New York 近郊の Wood-stock なる荒蕪地に，40万以上の青年たちを集めた Music and Art Fair，いわゆる New-Rock Festival や，その以後のそれに匹敵する，東西各地でのこの種の大集団を想起すべきであろう

9

往来する　ことにおける即物的な，空間的，時間的距離は，そのかぎりでは，計算機が処理するであろうが，まさにそのことへの妄信によって，人間的な意味での近さ，遠さを，いま喪失してしまっているのではないか，——現-存在は本質的に，距離を取り除きながら　ある　のであって，現-存在は，それが　ある　ところの存在者として，そのつど他の存在者を，近さへとおいて，自己に出逢うようにする

10

計画 projet のめざすのは，ethnos の建設であり，人の復権であって，それらは，実存の活動領野としての環境世界の，その設計図 plan において，建設に先きだって，存在論的に証明されていなければならぬ——計画 projet の過程で，諸意味としてのそのつどの出逢いにおいて，実存的に操作される諸事象は，ひとしく実存なる他我をも含め，それらの諸意味を，反呼応的にみずからに引きうけ，可能性として，それらの意味をみずからに隠しつつ，自己に結晶し，外的なるもの physis に立ち帰り，環境世界をそこに，事物的に構造する

11

故郷 ethnos は，現-存在の明るみにおいて，事実的に開示され，時空の働き Zeit-Spiel-Raum において，その風景が了解されるのであるが，それ

らの全体もまた，このような意味での計画 projet においては，可能性としてその存在意味の，事物性への住みこみなる，その結晶でなければならぬ

12

計画 projet として構造された，先駆的な環境世界は，くりかえすまでもなく，まさに生きられる世界にほかならぬのであるが，そこには構成的に結晶した諸意味，のみならず，両義的な反意味，もしくは多義的 ambiguous な諸意味が，やがて偶然性をもまじえつつ，ゆたかに現象することになろう，不明瞭されおいてではなく，意味のゆたかな充実においてである——存在のこのゆたかさを，今日の記号化され，誑かされている日常的な情報の，物量的な氾濫と取りちがえるべきではない

13

実存としての計画 projet は，外的なるもの physis への，言わば投射 projet の結晶であるが，それはまた，未来の到来としての現在の，未来への投射 pro-jet の結晶でもある——それ故，そこにあたかも無記の対象的事象かのようにして，投げ出されている外的なるもの physis の，その意味作用 poiesis もまた，未来連関なる現在に内属し，それは言わば，未発の働きにほかならぬ，したがって計画 projet が，無記の記号表象，もしくは事物に終るものでないことは明らかであろう

註：計画 projet において現わになる思惟の体系や，行動の構造や，外的なるもの，これらのすべてを，すでにして今日の日常性のもとに覆いかくされ，下意識においては，組織的な強制として作用している消費の感覚や，それと同じような日常的な良識において捉えるべきではない——都市を装置に見たて，その model change を思いつくような

14

計画 projet におけるいわゆる与件は，その存在意味の捜査において，その与件性を検証しつつ，したがってやがては，ひとしく諸意味となろう——気候，気象をも含めての地理学的自然や，諸文化財，考古学的遺跡をも含めこの人文学的景観などは，それぞれそのつどの存在意味を現わにしながら，総合的に，全体としての風土 climat であり，そう言う意味では，たとえいわゆる空気調節のごときでさえも，ひとつの個性的な風土化 climatisation でなければならぬ

註：存在者をそれぞれに現わにし，意味あらしめ，存在者たらしめる場としての 家〈建築〉 の現成が，大地と季節とを空間的，時間的基盤とする，と見るとき，その大地や季節は，もちろんいわゆる与件などではない——計画 projet における，そのつどの大地や季節は，存在を，その明るみにおいて現わにする時性の，したがってまた歴史の，みずからをも照らす光にほかならぬが，細部を欠如する大洋や大気には，この歴史性や存在性が稀薄であって，それらは生きてそのそこに 住む ことのできぬ，むしろ死のごとき闇黒でそれはあろう

またここに言う風土や，諸文化，たとえば言語などのそれぞれも，認識 epistémé の系においては，考古学的遺跡にほかならぬのであって，それらの遺跡はいずれも，みずからを湮滅しつつ歴史を生き，それによってはじめて，それらの全体を歴史と呼びうるのではないか

15

存在意味を剝奪され，対象化され，機構的に配置されている無記の，恒常的，平均的な諸事象は，考える事物 res cogitans としてのいわゆる人間，日常性に没入し，自己の存在を忘却しているいわゆる日常人 homo-quotidianus とともに，それらを諸資料 data として記号化し，考えることのない計算機に投入し，処理しうる——対象化されたものの，その表象的記号にほかならぬ図式 schéma や，図式的な check-list が，この形式的，機械的演算をたすけるのであろう

16

これらの無記の事物が，即自的な事物そのものとして，ここで言う計画 projet の場面に立ち現われることはありえない——無記の事物が，無記のまま，資料として処理されているかぎり，それはひとつの演算過程であって，実存における計画 projet の向う側に，それらはある

17

これらの無記の事物や，事物の集合や，諸資料や，もしくはそれらの記号的系列化にほかならぬ check-list などを，存在の意味の働きの場によみがえらしうるのが，すなわち建設者であろう——このことを可能ならしめるのは，これらのものが，もともと存在の頽落化の過程で定立され，その涯で構成されてくるべきものであって，その逆ではないからである

18

分析的な実証科学の諸成果は，そのかぎりにおいて，すなわち，みずからの不在証明 alibi において，もちろん尊重すべきであるが，それらの対象的に構成された世界での計測的な諸法則を，その手前の 生きられる世界 にそのままもち込むことは，論理的にも不可能であろう——全体的な，

非計測的な経験科学，たとえば精神療法における存在分析や，gestalt 心理学などの，新たな成立がこのことを実証するであろう

19

住む　ことは，建てる〈耕やす〉ことと，とどまる〈馴れる〉こととの両義性の，または　働くこと homo-faber と　遊ぶこと homo-ludens との両義性の，弁証法的披界 Entgrenzen としての，ひとつの全体的な存在可能性である計画としての，環境世界の構成もまたしたがって，生と死，行為と思惟，肉体と精神，感性と知性，政治と哲学などの両義的なるものの弁証法的披界としての実践にほかならぬ

20

住む　における，いわゆる日常性と非日常性との両義性についても，まったく同じであるが，しかしまた，日常性のただなかにおいて，日常性を超えるところの，休みなく終りなき弁証法的披界そのことこそ，新たな日常性であり，同時に，この日常的行持においてのみ，人は　安らぎ住む　ことができよう

註：ルフェーヴル Lefebvre の指摘する祝祭による無意味な日常性からの生の復権は，ボルノー Bollnow にとって，人があらゆる願朝を，喜ばしく充たしているような祝祭の瞬間においては，生の未来連関は断ち切られ，それは日常的時間の生の流れに，浮き島かのように浮きあがり，しかも人は，このような流れの日常的時間において行為し，配慮するほかないのである——これらの意味での日常性は，ふたつながら克服さるべきであろう

21

このようにして，めざされる新たな生活環境も，生活様式もしかし，存在忘却の長い歴史的時代でのどれかに倣うすべもなく，また，疑うべくもない正常性として，存在喪失の日常性にまったく組みこまれ，存在の桎梏となりつづけてきた世界観，人生観，価値感などもまた，実存的に，弁証法的にそれみずからを超えるし方において，その存在性，全体性を恢復しなければならぬ——ここにおいて，一時の弥縫の公害対策などではなく，存在論的，根源的な生活環境そのもの研究が，緊急に要請されるであろう

予備的考察

22

環境世界が，等質的 homogeneous な作用 poiesis の場でありえないことは，すでに明らかであるが，しかしまたそれは，単に topological な場と見ることもできぬ——現-存在の現位 da が，それ自身のなかで，距離を取り除く Entfernung と言うことと，方向をきめる Ausrichtung と言うこととの，二つの働きを担っているのであって，このことからすれば，それは言わば topo-hodological な場とも見うるであろう——ethnos，あるいはその風景における，途上的に半ば表象的な空間は，non-metrical ながらもある種の計測性をもつ

註：レーヴィン Lewin は，生活環境を topological field として，数学的にそれを構成しようとする——

gestalt こそ世界の出現そのものであって，世界の可能性の何らかの条件ではなく，それは規範 norme そのものの生誕であって，何らかの規範にしたがう実在ではなく，それはまた，内と外との一致であって，内の外へで投射 projet などではない，とするポンティ Ponty はしかし，コフカ Koffka の，地理学的環境 geographical space を生活環境 living space の条件と見ることや，ケーラー Köhler の，行動の場に力学をもちこむ isomorphism などに，gestalt 心理学の頽落を見るのである

23

建築家は，その profession において，存在における空間的な，もしくは時間的な諸現象に，とりわけ関心をもつ——技術 techne がひとつの作用 poiesis であり，しかも存在〈外的なるもの〉physis こそ最高の poiesis である，と言う意味で，建築における技術は，それらの存在を，存在としてのその作用において現わし出す仕法でなければならぬ，しかもそのような仕法において空間や時間が，純粋な表象としてではなく，けれども半ば表象的に立ち現われるのが，すなわち現位 da においてにほかならぬのであるから，建築家はみずから，まず現-存在でなければならぬ

註：ポンティによれば，知覚に内在的なある種の弁証法によって，知覚に，自己自身を自己にかくし，それ自身に与えられる現象を忘れて，対象の構成に向かう，のであるが，諸可能性の活動領野とは，言わばこの対象化への途上であろうか

24

現象的空間は，事務的地平における，metrical な事物的空間，道具的地平における，半ば metrical な記号的空間，実在的地平における象徴的空間，

もしくは有の地平，ときには地平の無における超越的空間などに識別しうる——超越的空間になんらかの方向はあっても，距離はなく，また象徴的空間は，ethno-ecological に半ば計測的であって，しかしそれは non-metrical である

註：カッツ Katz は，空間知覚の原型として，暗闇のなかで眼を閉じ，その時に見ることのできる原初的空間 original space を，ポンティ Ponty は，知覚経験の自然的な主体として，現象を生きている身体，それによって世界に住みついているそう言う身体性を挙げる——これらの両者の間には，言うまでもなく，現象学的な連関があるであろう

なおルフェーヴルが，等質的 homogène な，純粋に形式的な空間，たとえば Euclidean space のごときを，terrorisme の空間と規定していることを付記しておく

25

現象的時間は，死へと向かう有限の non-metrical な時間性のなかでの，現-存在の現位 da なる時性のまったき場，在在がそこに住みつくべき循環的な，したがってある意味では，半ば metrical な自然的時間，また等質でも，無限でも，連続でもないが，しかしなお metrical な，事物的な，日常的時間などに層化しうる，そうしてさらに，この日常的時間を，社会的な，したがって無名的 anonimous な義務的時間，反社会的な，私的 personal な自由時間，そうしてそれらをつなぐ，まったく無意味な被拘束的時間に区別しうる——生活環境の構成のためには，これらの空間や時間の計測性，もしくは非計測性，さらには ethno-ecological な意味でのある種の計測性などには注目しておくべきであろう

26

住むことが，すなわち在在することのすべてにほかならぬからには，計画 projet として構成されるすべての場面，あらゆる空間，あらゆる時間は，真に住むことの存在感によって，可能的に充たされていなければならぬ，したがってそれを時空の働きの場 Zeit-Spiel-Raum と見ようとするのである——Athene 憲章での住むことは，とどまり住む bewohnen を意味するのであろうが，それにしても，それを働くこと，楽しむこと，往来することとともに，等価な等分の四機能などと見るべきではなく，また現行のいわゆる地域制 zoning における，住居地域，工業地域，商業地域などの等価な，機械的な空間分割なども，全体的な住むことの分断の証言にほかならぬであろう

27

死にゆくものとして生きるそのことを考える現-存在は，単独者 Eingangor としての場をもとめるであろうし，親密さ intimite に生の充実をもとめる実存は，いわゆる日常性のなかでその働きの場 Zeit-Spiel-Raum を切りひらく lichten であろうし，存在性を剝奪されている存在者たちは，その復活を自由時間に希求するほかないであろう——構成される生活環境は，これらすべてのふさわしい可能性を，内実なる存在要請としていなければならぬ

28

低湿な，不安定な沼沢地，もしくは沖積平野に，自然発生的に成立し，受動的に展開し，堕性的に踏襲されてきた住宅形式や，集落構成などは，故郷 ethnos の新たな風景において創建，または再建されなければならぬ——新たな ethnos は，根源的に新たな風景を切りひらくであろう

29

全地球的 global な都市化の進行にともない，かつては便宜的に低湿地に造成され，自然的に，もしくは歴史的に拡大され，いまなお放恣な変貌に委ねられている，とりわけ水稲耕作地域での多くの中・小都市は，その地を生産的諸施設としてあけわたし，後背地の微高地，もしくは高燥な，堅固な地域での新たな造成地に遷居すべきであろう——ここにおいて，地域制とともに立地法や，あるいは交通計画などにおける経済主義を，きびしく反省すべきであろう，生産，もしくは交通とは，本来的に人間存在を保証するそのこと以外の何ごとでもありえない

30

とどまり住む bewohnen ことと，生産する bauen ことは，今日では相補的関係としてしか認められない，それ故に居住地は とどまり住む ことの諸可能性によって，また生産地は生産自身の論理によって構成されるであろうが，住む wohnen ことの全体性，根源性は，生産するそのことをも包括し，生きる そのことの名において，その他のすべてに優先する——したがって，生産するそのことへの存在論的規制は，もとより当然であろうが，生産するそのことに内在的な消費，もしくは生産と廃棄なる両義性は，死へと生きる存在の根源的な両義性とともに，いずれもいまのいわゆる技術社会での，とりわけその生産的系での克服は不可能であろう，その克服のためには，〈住む〉についてと同じようにして，この両義性の ethno-ecological な系における弁証法的超克としての，新たな定義づけが要請されるであろう

31

住まい は内世界的存在者であり，したがって顕著にそれは存在的でなければならぬ——いま広汎に進行しつつある自動機械化と，それにつれてほとんど空虚な集合となりはてた労働は，存在の喪失感を下意識に抑圧し，その深みからの一そう熾烈な存在欲求によって，いわゆる分裂症的精神病者を多産しているが，住まい はその存在恢復のための予防的，もしくは治療的な場として構成されなければならぬ——単独者としての，あるいは連帯の場としての

32

高度化された技術社会では，今のところ主婦に，女としての参加の場面はほとんどなく，それだけに一そうつよく束縛される家庭での日常生活が，抑圧の習慣化に隠蔽されたまったき存在喪失の，その広さと深さとにおいて，極度なまでに頽落し，そこから逆に，存在性への激しい衝動が，しばしば hysteric に表面化し，のみならずそれが本源的な存在の底深い両義性と不可分な葛藤となり，そのあたりに存在的亀裂をひきおこしているのではないか——女性の，女としての，もしくは人としての存在化のためには，男女関係と母子関係との再分離を，まず検討しはじめるべきではないであろうか

33

絶えず非青年へ，頽落的な日常的成人へと生きている青年は，保守と変革，反逆と追随，攻撃と逃避，anonimity と personality などの両義性からその目をそらせ，すでに成人化してその存在喪失に無知でいるか，そうでなければ，そのままでは救いのない両義性にその足をすくわれているのではないか——考えること，話すこと，それらにおいて〈存在する〉ことへの深刻な反省と，その実践とが，世界的に，全般的な広がりにおいて，今日ほど強く，しかも緊急のこととして，要請されたことは，歴史上かつてないであろう

34

目前の死へと生きる老人のなかには，もはや生物学的，もしくは生理学的な生をむさぼるに過ぎぬような，そう言う余生をおくりつづけているものも，あるいは少なくないのではなかろうか，死へと生きる，その根源的な存在のし方こそ，すべての人に平等であるにもかかわらず——いわゆる養護施設なるものが，この差別を強制していはしまいか，むしろそのような場所をもまた，生の根源的な開け，存在の明るみにおける社会的参加の場として考えなおさなければならぬのではないか

35

すべてこれらのことから，ともに実存の場に投げ入れられ，存在的に呼応し，そうして 考える こと， 話す ことを，そのそこに引きいだすその本来の教育こそ，人間復権の，とりわけ今日の広汎な，しかも深まり行く存在喪失の，その克服のための最後の機会ではないであろうか——そのような教育の場は，それが本来の教育の場であるかぎり，たとえどのような制度のもとであれ，どのように名づけられ，さらにまたそれがどのような形式においてであろうとも，ほかならぬ近さへと人をさそうその 現位 da の現成でなければならぬ，そこにはじめて，自他の真の出逢いの，自己実現のその場，ethnos の原像を見ることになるであろう，そうしてそのほかのことについては，teaching machine が正確な情報を，誤りなく伝達するであろう

36

住む のこのような生活環境の構成は，それ自身，すでにして実存することのひとつの現われにほかならぬのであり，それ故に，これらの予備的考察の実存的な諸原理につらぬかれて，はじめて空間的に，もしくは時空的 Zeit–Spiel–Raum に，全体的に構造され，それ が実践的計画 projet となりうるであろう

付記

37

21世紀初頭までの，未来連関において開かれた系としてのこの30年間は，人間存在の成否にかかわる，まさしく運命的な時間となるであろう——生活環境の全体性について，いま人が，真に人であることを鋭く問いかけられているのである，建築家もまたその例外ではありえない

38

それ故に21世紀もまた，人の存在を賭ける運命的な，存在論的実験の世紀でなければならぬのではないか

参考書目抄：——

M. Heidegger, Sein und Zeit, 1927. et al.
細谷他訳　存在と時間　理想社　他

G. Bachelard, L' intuition de 1 instant, 1932. et al.
樹下訳　瞬間と持続　紀伊国屋書店　他

M. Ponty, La structure du comportement, 1943. et al.
滝浦・木田訳　行動の構造　みすず書房　他

J. P. Sartre, L' être et le nean, 1943. et al.
松浪訳　存在と無　人文書院　他

P. Foulquié, La dialectique, 1947.
蔡井訳　弁証法　文庫クセジュ　白水社

E. Vietta, Die Seinfrage bei Martin Heidegger, 1950.
川原訳　ハイデッガーの存在論　理想社

A. Portman, Biologische Fragmente zu einer Lehre von Menschen, 1951.
高木訳　人間はどこまで動物か　岩波新書

O. F. Bollnow, Neue Geborgenheit, 1955. at al.
須田訳・実存主義克服の問題　未来社　他

M. Boss, Psychoanalyse und Daseinsanalytik, 1957. et al.
笠原他訳　精神分析と現存在分析論　みすず書房　他

F. J. J. Buytendijk, Mensch und Tier, 1958.
浜中訳　人間と動物　みすず書房

V. Frankl, Das Menschenbild der Seelenheilkunde, 1959. et al.
宮本・小田訳　精神医学的人間像　みすず書房　他

R. Heiss, Wesen und Formen der Dialektik, 1959.
加藤訳　弁証法の本質と諸形態　未来社

A. Gehlen, Anthropologische Forschung, 1961.
亀井他訳　人間学の探求　紀伊国屋書店

B. Dubos, Man adopting, 1965. et al.
木原訳　人間と適応　みすず書房　他

H. Lefebvre, La Droit a la ville, 1968. et al.
森本訳　都市への権利　筑摩書房　他

増田友也，建築的空間の原始的構造，昭和30(1955)年
金子武蔵，ハイデッガーの思想，清水弘文堂書房，昭和44(1969)年
木田元，現象学，岩波新書　1970年